

---

# 短

小野チカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短

### 【NNード】

N9783Y

### 【作者名】

小野チカ

### 【あらすじ】

ジャンルいろいろな小説を混ぜた短編集「サイトにも同じ物を掲載しています」

## 小心者の男【大学生×大学生・彼氏視点】

俺の彼女は俺より男っぽい。見た目が、ではなく、中身が。

だから、たまに女であることを忘れてしまう。

それが、彼女にとつて地雷ポイントだと言つことも、忘れてしまう。

「なあ、空知。今日空いてねえ？ 夜、合コンあんだけど」「

今日は晴れでも雨でもない、かといって曇りと言つには向こうが  
ちょっと晴れてるような微妙な天氣だ。大学のカフェテラスで二限  
を終えた俺等は紙パックのジュースや、缶コーヒーを片手に携帯を  
いじつたり、iPhoneいじつたり、PSPをいじつたりしてい  
る。椅子に体育座りをしていちごミルクを飲んでる俺に、てつペー  
が尋ねた。

俺は、出会つた女八割に“かわいい”と言われる顔をしている。  
思春期にはそこそこ悩んだけど、そのお陰で女に苦労したことはな  
い。特に、年上のオネエサマ方からは受けがいい。だから、大学に  
入つてやたら“人集め要員”として声がかかる。

それは彼女と付き合いだした一年の時も変わらず、こうして就職

活動が一段落した四年になつても相変わらずだ。

「いいよー、今日はどーこ?」

「知り合いの『デパートの受付嬢と、エレベーターガール』

幹事役のてつペーがそう言つと、俺らのグループのやつらがおお、と声を上げる。なんでもてつペーの姉ちゃんの知り合いの職場の人たちらしい。もうそれ遠過ぎて、知り合いとかいうレベルを越えてる。

高校からの付き合いのてつペー、俺。気がつけば仲良くなつてた、つっちゃん、秋生の四人でこの四年間過ごしてきた。その間にそれぞれ彼女が居たり居なかつたりしたけど、現時点では俺だけだ。

「空知、お前この間も行つてたけど、鷹野さんいいの?」

秋生と俺の彼女と同じ高校だ。仲良くはないけど、顔は知つてる程度らしい。

秋生は、四人の中で一番頭が良くて、オセロが無敵で、マリオカートが激弱な奴だ。俺、賢いですつてオーラがびんびん出でいる。シルバーの眼鏡がまた、出来杉君度を上げている気がする。

「いいんじやない。今日カナ、バイトだし」

「空知は冷たい彼氏だよ!」

「どうのつっちゃんに言われたくない」

「ちーじー」「ルクの紙パックを飲み干した俺は、よいしょと言つてそれを「ミミ箱に投げる。入つた。よし！ 今日はなんかいいことがあるかも。」

「俺がドミだらうがドミだらうが、関係ねえだら」

「え、なに？ ドミなの？ 踏んであげようか？」

「んな趣味ねえよ。アホか」

「つちちゃんの、男っぽい顔が俺は好きだ。」

ボーアイズラブ的な意味合いじゃないよ！ 単純に俺は中性的な顔だから、男っぽいつちちゃんの顔がいいなーって思う。立派な眉毛とか、鷲鼻とか、切れ長の一重の眼とか。

あと、ずっとフットサルやってるから程よい筋肉マンなところもいい。俺、どれだけ鍛えてもあんまり筋肉つかないから、羨ましいことこの上ない。俺がプチキン肉マンになつても、カナは額に肉つて書いて楽しまれるのがオチだ。

てつペーは早速、携帯で今日の女側の幹事と電話している。相手の女は声がでかすぎて、内容がダダ漏れだ。メンバーの名前を読み上げていると、キャアキャアと五月蠅い声が聞こえた。

「お、噂をすればなんとや！」

「つちちゃんがそう言つて顎を上げた先にはカナが居た。ものすごく氣怠そつに自販機のボタンを押している。」

カナが女の子だと思つるのは、長い髪の毛と、セックスしてる時だ

けだ。

「おーい、鷹野！」

「バカ、土田。呼ぶなよ」

つっちゃんの袖を引っ張った秋生は、呼ばれた事で俺等に気付き  
こっちへ向かつてききた力ナを見て、舌打ちした。

「なんで？」

「お前のそういうとこ」が、女に嫌われるんだよ」

「は？ 意味わかんねえ」

大雑把なつっちゃんと、神経質な秋生はたまにぶつかる。でも仲  
は悪くないとと思う。俺は大学以外でのつっちゃんと秋生をしらない  
から、多分、だけど。

俺が合コンに顔を出す度に秋生は心配してくれるけど、カナは俺  
より男っぽい。男の俺が言つんだから、確實だ。

「なに、汐見たち今日も合コン？」

ヤニ魔のカナは声がハスキーだ。

でも、セックスでいくときのカナの声はちゃんと女の子で、これ  
を知つてゐるのがこの中で俺だけだと思うと、ちょっと優越感だ。

秋生はそうだよ、とぶつきらぼうに返事をすると、横からつっち  
やんが、デパートの受付嬢とエレベーターガールだぜ、と何故か得

意げに言つた。

「いいなあ、高確率で美人じゃん。足だつて綺麗でしょ？ 私も目の保養したーー」

いちごミルクのパックにストローを刺しながらカナが言つ。深爪じやないかと思うくらい切りそろえられた爪は色氣のイの字もない。

「……空知も行くよ」

「いつてらつしゃい」

ほりみろ、カナはいつてつやつだ。

残念だつたな、秋生。

「いつてらつしゃいつて……普通ヤキモチ妬かないの？ 女つて」

「他の女の子がどう思つてるかなんて知らないし。それにさ、毎日トンカツだと飽きるじゃん。たまにはお茶漬け食べたくなる気持ちと一緒にじゃないの？」

カツターシャツにジーパン、スニーカーはカナの標準装備だ。長い髪の毛は、夏以外はそのまま下るされている。いちごミルクを飲みながら、カナはジーパンのポケットから煙草を取り出した。百円ライターで火をつけると、上手そうに吸う。いちごミルクと煙草の組み合わせなんて俺には相当エグく思えるけど、学校で見かけるカナは、よくこの二つを持っていたりする。

「鷹野さん、それは浮氣した男が言い訳に使つ文句だよ」

「わう？ もつともじゅん」

ふーと吐いた息は風に流される事もなく、そのまま真っ直ぐ上に上がった。

「ンラチ、ちゃんと女の子の分も奢つときなよ」

「へーー」

俺の名前を呼ぶ時のカナは、他の女と違う。媚びも、計算も、甘えも含まれていない。ただ単に、単語を言っているだけだ。俺なんて興味ない、って言われているようなその言い方を、俺は密かに気に入っていたりする。

はいはいじゅーねえーと言つて電話を切つたてつペーが、よ、とカナに手を上げると、カナも煙草を持った手を上げた。

「今日も空知借りるな」

「借りるもなにも、あたしのモンじゅないし。お好きにゾー」

こつこり笑つたカナは、もう一息吐くと灰皿に煙草を押し付けた。雑に頭を搔くと、いわく「ミルクを一気に飲み干すと、それを俺の後ろからひょいと投げた。「ミミ箱のフチに当たつて、紙パックが「ミミ箱に入る。

「よし、今日はいいことがあるかも。じゃあ諸君、健闘を祈る！」

じゃあねーと手をふりながら去つて行つたカナを、秋生は不思議

な生物でも見る様な目で見ていた。秋生は俺がカナと付き合い始めた時、首が取れるかと思うくらいかしげていた。

「……鷹野さんって空知のこと本当に好きなのか？」

そう聞かれても、カナの気持ちが手に取る様にわかれれば、俺はこんなところでバイトの合間に縫つて合コンに参加したりせずに、Hスパーを職業にして小金持ちになつていてるに違いない。

秋生の言葉にてつペーも頷いていたけれど、俺はこいつらが俺に何を言わせたいのかよくわからなかつた。

「じらね

と言つた俺に、いいよな、と言つたのはつちやんだった。

「俺の前の彼女なんてAV見ただけで浮氣だなんて言われてたまつたもんじゃねえよ。俺もカナちゃんみたいな物わかりのいい彼女が欲しいわ」

「カナはやんないよ

笑つて言つたけど、半分本気だ。

カナがつちやんみたいな男がタイプだと言つたら、俺は勝ち目なんてない。中身はともかく、外面は対極にいるような男だ。

俺だつて最初はつちやんみたいに思つてた。カナが俺を好きで、最低でも一緒に居て楽だから付き合つてるんだと思ってはいる。

けど、時々ふと思つ。

カナの独立欲のなれい。  
物わかりの良さ。

俺じゃなくとも、いいんじゃないかつて。

「どうだつたー、Hレベーターガール」

同じ講義を取つていたカナが、俺の席の横に立つて尋ねた。カナに会つのはあれ以来3日ぶり。一昨日メールをしたけれど、その内容は哈コンのことではなく、今日提出の課題についてだつた。

「かわい子ちゃんがこっぽいいた

「へえ、よかつたじやん」

カナは同じ講義を取つても隣の席には座らない。例え友達が休んでも、カナは違う席に座る。理由は知らない。

俺は、束縛されるのが嫌いとも、くつつかれるのが苦手だとも言

つたことはない。だけど、カナはそうする。

カナの前に付き合つてた女は、大学内でも四六時中一緒にいることが当たり前、みたいな女だつたから、それをみていたカナが何を思つたのかはよく知らない。カナは過去を聞いて来ないし、俺も言わない。聞かれてもないのに言つてたら、ただのアホだし。

カナが去ろうとした時、土田が上から下りて来た。階段教室のこの部屋は、後ろが生徒の入り口だ。

「よお！ 空知、カナちゃん」

「つっちー、やつほー」

ひらひらと手をふるカナは、いつもと同じ。よ、と手を上げた俺も、いつもと同じ。

「カナちゃん聞いてよ、空知の奴さあ、この間の合コンでオネエサン一人お持ち帰りしやがつてよお、超美人で足が綺麗なエレベーターガール。空知が来ると盛り上がるからいいんだけど、みんな空知に持つてかかるから散々だぜ」

笑いながら言つ土田もいつもと同じ、俺も本当のことだから否定しない。これも、いつもと同じ。

お持ち帰りだなんて言つけど、実際は駅まで送つてさよなら、だ。別にカナ命じやないけど、誘われたからつてホイホイ乗るほど盛つてない。絶倫じやないし、俺はカナと自分の右手で十分だ。

「まじで。やるねえソラチ」

「見る？」Jの子、「Jの子」

何が楽しいのか、携帯で取った合コンの様子を嬉々としてつっちゃんがカナにみせてくる。

「ソラチの見る田残念だね。私この隣の女の子の方が好きだ」

「やつぱつー？ 僕もこっちの子の方が好み」

文字にすれば、カナの言葉は男友達と喋っているようだ。

「つていうか、カナちゃんってホント怒んねえのな」

「何が？」

「空知が浮氣してたらどうする？ カナちゃん」

くらくら笑いながらつっちゃんが尋ねる。その問いに、僕もカナもつっちゃんを見上げた。笑いながら、つっちゃんはカナを試している。

「つっちーには教えない。意地悪だから」

「やりと笑つてそう言い放つたカナは階段を下りていった。僕は、その返しに何か違和感を覚える。いつもならカナは「どうもしない、ソラチの自由だ」と言うのだ。

「なに人の彼女で遊んでんの。つっちゃん」

「遊んだんじやなくて試したんだけどな。はぐらかされた」

空知は力ナちゃんのどこが好きな訳？ とつちやんに聞かれて、  
俺は戸惑った。

取り立てて美人でもなく、  
スタイルが良い訳でもなく、  
いつもヤニ臭いし、  
オシャレに興味ないし、  
下ネタ話しても平氣で割つて入つてくるし、  
俺が合コンに行こうが、女の子と一人きりで会つて「ようが詮索  
しないどじるか、ふーんで終る。

俺のことが好きだ、と言つてくれたこともない。

「わかんね」

「お前等大丈夫か？」

「……しらね」

何も言えなかつた。

いつもと同じだつたはずなのに、急にぽつかり空氣穴が空いたよ  
うだつた。

\*\*\*

カナは突然家に来る。

なのに、合鍵を渡そうとしたらいらない、と言つのだ。

「……俺がいなかつたらどうするわけ

「居たからいいじゃん。お邪魔しまーす」

いつもの格好に週刊少年ジャンプを持ったカナが上がり込んできたのはあれから一日後。ベッドの上に寝転がり漫画を読みあさるその姿は、本当に彼女ではなく男友達だ。

てつペーだつて、事前に連絡はくれるし、来て早々何の会話もせずに漫画を読み出したりしない。

「俺、後30分したらバイト行くんだけど

「こつてらつしゃー

「泊まつてくの?」

「適当に帰る

その返事に俺は首をかしげる。  
カナは一体何しに来たんだ?

「……何しに来たの?」

「用がなかつたら来たら駄目?」

「そんなことないよ」

「じゃあいいじゃん」

そう言つて俺が用意している間も、漫画を読むだけでカナは他に何をするわけでもなかつた。

「カナつてさあ」

「なに?」

「彼女つていうよりツレっぽいね。物わかりいいし、女っぽくないし、嫉妬もしないし。たまに女だつたつけて思う時があるよ」

少し寂しいとは言わない。

本当に俺のこと好き? なんて女々しい事は聞けない。

その言葉のどれもが地雷だつたことを、俺はすっかり忘れていた。言い終わつた俺は靴紐を結んで立ち上がつた。

「じゃあ、鍵ここに置いてー……」

続きは、飛んで来たジャンプをよけたことで消えた。ガチャン、と鈍い音を立てて玄関扉に当たつたジャンプが落ちる。

「あつぶなー、何してんのカナ」

ジャンプを拾つて顔を上げた俺は仰天する。

あの、ホラー番組を見ても、こしょばしまくつても、暗闇に一人

きつにしても泣かないカナが、田に涙をためていた。

「毎回畠山に田ぐじら立てて、泣いて止めて、毎日メールしてくれなきや怒つて、彼氏の部屋に入り浸るような依存する女なり、ソラチは私を好きでいてくれるの？」

しまつた、と思つた時には遅かつた。狭い玄関に立ちぬくした俺を押しのけて、カナが部屋を出て行つた。頭を搔いた俺はやつちやつたな……と呟いた後、カナがまだ、俺のことを青山君と呼んでいた時を思い出した。

「青山君さあ、女変えるペース早くない？」

あの頃のカナは、髪がボブだった。赤い眼鏡をしていて、シャツとジーパンは同じでも、靴はぺたんこ靴でスニーカーではなかつた。

「女つてめんぞーなんだもん。あれしろこれしひ言ひし、それしたらしたで、足りないつていうし。どうこう腦みそしてんの？」

「私に聞かれても知らないよ」

「未知の生き物だ……面倒くさすぎる」

「……じゃあ、どうこうう女の子だつたらいいな、って思つたの」

「女遊びも笑つて許してくれる懐の広さがあつて、俺の言つ事に反論しないでついてきてくれて、貧乏になつたらお金かしてくれる子だな」

「都合のいい女を聞いてるんじゃないんだけど」

笑っていたから「冗談として聞き流しているもんだとばかり思つていた。それ以前から、カナと連絡先を交換していたけれど頻繁にやり取りしていたわけではなかつたし、一番最初に盛り上がつた話もジャンプに載つてた漫画の話だつた。カナは最初から、さつぱりした女なんだと思い込んでいた。

お金を借りた事はないけれど、カナは女遊びを許容してくれて、俺が言う事に反論したことなんて一度もない。

だけど、

このままカナを追いかける程、俺等の付き合いは情熱的ではなかつた。

「……なんだ、カナのやつ

なんでかわからぬいけれど、『追いかけたら負け』だと思つた。そのままバイトに行つた俺を、カナはどう思つたのだろう。

あれからメールも電話もしてみたけれど、カナは連絡してこなかつた。一日になると、今度は俺が苛々してきて、連絡してゐるのに、なんで無視するんだと思い始めた。

だから、一週間の日々が過ぎて大学に行つた時、寝耳に水だつた。てつペーがやたらニヤニヤしているのが気持ち悪かつたんだけど、その原因はカナだつた。

「空知、カナちゃんにふられたか

おはよー、をすっぽかして言われた言葉がコレだ。俺はあれが別  
れの現場だったとは思ってない。なんのことかわからぱりだ。

「おはよー。つづく。なんで?」

「は? 違うの」

「俺は覚えないけど」

「じゃあなんでカナちゃん急にあんなったわけ」

「なにが」

「え、お前知らねえの?」

「だから、なにが」

苛々するなあ、とつづく。俺はふつ、と吹き出す。からかわれているようで面白くない。

「見て来いよカナちゃん。俺一瞬誰かわからなかつたわ

なんだそれ。

本当は走つてすぐにでもカナを見たかつたけど、それこそ本当に俺は何も知りませんでした、つていうのがバレバレで、なけなしのプライドに負けて行けなかつた。ふーん、とだけ返事をして講義を受けるけど、全然頭に入つてこない。

元々今日はカナと同じ講義が次にある。急がなくつたって、と何度も自分に言い聞かせた。

「なあ、空知。お前カナちゃんと別れたわけ?」

教室を移動している間、同じ台詞を同じよひに「ヤーヤーヤしながらつっちゃんが言つた。

だから、挨拶は人間の基本だろ!」

「おはよう、つっちゃん。なんで」

「ほらー、女が髪切るときつて失恋したつて言ひじやねえか」

その言葉に俺は驚いた。驚いたつていう感情を表に出せないようになに頑張る。

本当は、思い切り動搖してたけど。

あのカナが?

髪の毛を切つた?

「ソラチは髪の毛掴むの好きだね」

キスをする時、カナとセックスしてる時、肌にかかる長い髪がこそばゆくて、でもそれを掴むのが好きだった。くすくす笑いながら言つたカナが遠く感じる。

「暑くなるからじゃない

夏はもうすぐ……といつには微妙な季節だ。けれども、そんな言葉しか出て来ない。

「空知が知らぬ間にふられたのかもな」

くすっと笑う秋生は、だから言つたのに、と続けた。

「鷹野さんがいくらサバサバしても、女つてことだよ」

そんなこと、わかってる。  
わかつてたんだ。

俺が一番、わかっているつもりでいたのに、  
あんな言葉をかけた、俺が悪い。

「秋生に言われなくともしつてますー。それに、別れてないし」

心の中はぐちゃぐちゃだ。  
でもそれを悟られるなんて格好悪い。

カナの元へすぐ行つて「暑くなつたから切つただけだよ」って言つて欲しい。暑がりなカナのことだから、笑つてそういうに違いない。カナと過ごした2度の夏前は、いつも髪の毛切りたいてアイス食べながら言つてたんだ。

早くカナを見たい気持ちと、  
見たくない気持ちが入り交じる。

どうして俺は、こんなところなんでもないフリしてるんだろ？  
それが一番滑稽なのに。

いつ入つてくるかと背中に手で搔きたい気分になりながら、俺はいつも席に腰を下ろす。予想に反して、鐘が鳴つても教授が来て、終わりの挨拶をして出て行つても、

カナは来なかつた。

「ほら、やつぱつお前ふられたんじゃねえの」

「うぬせえ、バカ」

つちゅうとのひざい腕をほどいて、俺はカナの友達屈のところへ階段を下りて行く。

「あ、青山

「おはよ木下さん。ねえ、カナは？」

「カナちゃん今日は体調悪いって前の授業の休み時間に帰つたよ

しらなかつた？」と聞かれて苦笑するしかない。ありがとう、とだけ言つて、俺は階段を上がる。

荷物を持つとそのままじや、と手を上げた。

「え、空知。この後の授業どうすんの？」

つちゅうさんが言つけど、俺は首をふる。

情熱的ではないけれど、このままふーん、で済ますほどには冷めてはない。

「代弁よろしく～」

「貸しは高いよー。」

てつペーの声に俺はおう、とだけ言った。どうせ焼き肉の喰い放題奢れ、程度のもんだ。バイト代が入つたら、いくらでも奢つてやる。

カナの自宅、

カナのバイト先、

二人がよく行く喫茶店、

カナがよく行く本屋。

雑貨屋、

服屋、

漫喫、

カナの友達の家。

どれをあたつても、カナはいなかつた。  
もう陽も落ちて、辺りはうす暗い。

「どこいったんだよ、カナのやつ」

これ以上は想像がつかない。

うろうろしていても無駄足だと思つた。

「明日は来るかな……」

俺の記憶が正しければ、カナは明日授業のはずだ。

とぼとぼと帰る俺は情けない気持ちでいつぱいだった。ダメ男のレツテルを自分で貼つて歩く。

鍵を回した瞬間、引ひつとした扉は開かなかつた。

「は？」

そういうえば、部屋の奥で電気が点いてるよりも見えなくはない。

「なんで？」

開いていた鍵を閉めた俺は、もう一度鍵を回す。出かける時、多分施錠したはずだ。

「おかえりー」

カナの声に、俺の午後を返せと叫びたかった。

「なんでいんの？」

「こちや駄目？」

「いや、いいけど。つていうかどうやって入ったの」

「合鍵くれたのはソラチちゃん」

「さうだけど、はあ？ え、なに？」

「なにが」

玄関に突っ立つたままの俺と、ベッドの上でジャンプを読んでるカナはちぐはぐな会話をする。カナの見た目に俺は驚いた。

真っ黒だった髪の毛は明るい茶色になつていて、  
髪の毛がボブになつていた。

赤い縁の眼鏡をかけて、  
薄いピンクのカットソーに、短パンを履いている。

二ハイソックスをはいた足をベッドでパタパタさせていた。

「……なにその格好」

「にあつ～？」

首を傾けてピースをしているカナだけど、大きく開いた胸元が俺は気になつて仕方がない。

なんちゅう露出の高い服を着てるんだ、カナ！！

「髪切つたの？」

「切つたように見える？」

ため息をついてヌーカーを脱ぐと、俺はコックをひねつて水を出した。コップを出すのが面倒でそのまま飲むと、カラカラだった喉が潤う。コックを閉める音がやけに響いた。

「どうこいつ。切つてんの、切つてないの？」

濡れた口を袖でぬぐつて振り返ると、すぐ目の前にカナが居て驚いた。

「うわー」

ガチャンと俺のベルトがシンクにあたつて、金属的な音を立てる。

「女の子っぽい？」

にやりと笑うカナが小悪魔に見える。  
俺の首に手を回して、顔を近づけた。

「カナは女だろ」

「誰かさんが、私が男だったか女だったか忘れちやつたつていうからさー」

「……すいません」

「聞こえません」

「申し訳ありませんでした！ カナは女子です。立派な女子です」

よろしい、と黙つて笑つたカナからは、ヤーの匂いじゃない良い香りがする。

女っぽい女は面倒くさいと思つていたけど、これはヤバい。  
今すぐ押し倒して、滅茶苦茶にしてやりたい。

キスをしようと近づけた俺の顔に、手が伸びる。

「焦つた？」

「超焦つた」

その返事に満足したのか、カナがキスをする。俺はそのキスを激しいものに変えた。

力チャ力チャと、カナの眼鏡が当たる。付き合いつよくなつて、カナは眼鏡からコンタクトに変えた。その理由はもしかして、なんてカナの唇を貪りながら考えていた。

服の裾から手を入れて、カナの胸を触った瞬間、はつと気付く。

「あれ、カナ体調悪いって言つてたのつてもしかして……」

「あ、そうだ。忘れてた。ごめん、生理」

「まじかよ！」

「はい、俺生殺し決定。」

カナの生理は重い。

薬を絶対飲むし、胸は張るらしくて触ると痛がる。これから一週間前後、俺は待てをくらわされるのだ。

「ごめんね」

「……いこよ」

いいよって言つしかないし。

ごめんよ俺の息子。ゴットハンドがなんとかしてやるから、まあ待て。

お詫びに「一ヒー入れるね、と全然申し訳ないと思つていないう色で言いながら、カナが台所で湯をわかしていた。

俺は鞄を置くと、カナの背後から抱きしめる。カナの頭は俺のアゴを置くのに丁度良い高さだ。

「危ないっすよー、ソラチさん」

カップにインスタントコーヒーと砂糖を入れながらカナが言つ。

カナは砂糖一杯と牛乳。俺は2杯と牛乳。

それはもう言わなくても、カナはずつと前から知つていてる。

「髪の毛本当に切っちゃつたの？」

「私の技術つてすごいでしょ」

質問には答えずにカナが上を向いた。  
俺はわけがわからず首をかしげる。

パチンパチンと頭の後ろで何かを外すと、ボブがロングヘアになつた。

「……何マジック

「すごいでしょー、みんなに髪切つたって言わされて面白かった」

そのせいで、俺はふられた疑惑を持たれましたけどね…！  
けだけた笑うカナはいつものカナだ。

シャンプーのいい匂いのするカナの頭をくんくん嗅ぐ。

「犬じゃないんだから。臭いよ

「臭くないよ

「ふーん

「ぼ」ぼい出したミルク鍋の火を止めると、マグカップにお湯を注ぐ。

カナの眼鏡が一気に曇つた。

「……おお、見えない

「あぶないよ

取手を奪つて俺がいれる。

見えないじゃないよ、こぼれて火傷したらどうすんの。

「そういう髪型にしたかったんだ、切つたらよかつたのに」

注ぎながらそう言うと、カナは俺の体に思い切り体重をかけて寄りかかった。あぶねえって。おい。

「誰かさんが掴むの好きだから、置いといてあげたのに。切つた方がよかつた？」

意地悪く笑うカナに俺はお手上げだ。

「……だめ」

短いのも似合ひなど、やつぱり長いまづがいい。

茶色い方が、白い肌のカナには合ひがするけど。

「あ、でも俺と話る時はこいつ格好もたまにはアリだよ」

「ムラムラする?」

「するする」

その返事にカナが笑う。

考慮したげる、と言つてマグカップ二つを持つてテレビの前の台に置いた。

「あ、ソラチ。冷蔵庫にケーキあるから出して」

「ケーキ?」

「や。付き合つて3年目。これからもよしへケーキ」

そういえば今日は俺がカナに告白をして、付き合つ出したしただ。あれから、3年になる。

「今年だけ?」

「毎年してゆるよ」

「ほんと?」

「本当」

それくらい覚えてるよ、と言った力ナは早く、と俺を急かした。  
冷蔵庫の箱は明らかにホールの大きさだ。  
そういえば去年も、いきなりホールケーキを買って来た覚えがある。

そうか、あの日が一年前の今日だったのか。

「食えなくない?」

「去年食べれたから大丈夫だよ」

甘いもの好きなくせして、生クリームが苦手な力ナは殆ど食べない。

俺の明日の『』飯は朝・昼・晩、ケーキに決定だ。

いくら甘いもの好きな俺でも、想像しただけで胸焼けする。

「開けるの怖くなつてきた……」

「なにそれ」

早くーと体育座りをして待っている力ナは子供ものようだ。

「それが嫌なら、来年はソラチが用意してね」

そう言つて笑つた力ナに、俺はへーいと返事をする。  
来年は、力ナの好きなチーズケーキにしてやるつ。

俺の彼女は俺より男っぽい。ただ、女っぽいところもちゃんとある。

「あー、お腹いっぱい」

「まだ食ってないし。カナもちゃんと食べよう

「ふともうー」

「太れ、太れ。カナ・デラックスになれ

「……それでも好きでいてくれる?」

もちろん。ただ、ダイエット指導するけどな。

## 試す女【大学生×大学生・彼女視点】

自分で自分が変な人間だと、ここ数年で何度も思つ。

「加奈ちゃん、また土田のバカが企コン企コンつて騒いでたよ？青山君もさあ、断ればいいのに。加奈ちゃんが可哀想だよ！」

田の前でふりふり怒つている木下美樹は、大学に入つて受ける講義が沢山かぶつていたのもあって、なんとなく一緒にいる。小動物、という例えがピッタリな背の低い、愛らしい顔立ちをした女の子だ。

「ソラチが行くと、オネエサマ達の出席率がいいんだよ」

「でも、青山君には加奈ちゃんつていつ彼女がいるのに。哲平くんだけでも全然出席率上がると思つんだ」

ソラチの高校時代からの友達だといつてつペーは、うちの学部では特に人気がある。さわやかな笑顔を無料で振る舞つて、優男だ。

「いいんじやないの。息抜き、息抜き」

「……加奈ちゃんは、余裕だね」

それから、木下美樹は一時間に渡つて付き合つて、彼氏の愚痴をこぼした。うんうん、と話の合間に相槌を打つ。

私が余裕？

いつも溺れそつでわめいているのに。

新しい出会いの場なんて行かないにこしたことはないし、オネエサンをお持ち帰りなんて聞けば、事実がどうであれ腸が煮えくり返る思いだ。

けど、

それを言つてしまえば、私はソラチに捨てられる。

100%とはいわなくて、捨てられる確率が高いとふんでいる。面倒くさい、と言われて捨てられたら私は立ち直れそうにない。

元々、私は同年代の女子と比べれば淡白なほうだと思つ。

メールも電話も必要最低限だし、

アイドルには興味ないし、

化粧は好きだけど、香水とかネイルまでは興味がない。

ウインドウショッピングは好きだけど、流行を追いかけるのは疲れる。

甘いものは好きだけど、生クリームは苦手だし、

おしゃれなカフェよりも、大衆食堂やラーメン屋の方が好きだ。家事も裁縫も、どちらかといえば苦手だし、

今流行っている音楽の半分もわからない。

そういう女子は私以外にもいるけれど、少数派だと聞つのはひしひしと感じている。

年子三兄弟の、真ん中というせいもあるかもしれない。上に兄、下に弟、男にはさまれた女の私は、男勝りのところがあると思う。

田舎で生まれて育つた私が行つた小学校は、全校生徒が両手で

足りるほどで、男女関係なく、森や川や野原で遊んだ。すくなく楽しかった。永遠に続けばいいと思っていた。小学校5年生の冬、父親の仕事の都合で都会上に引っ越しした。そこで、世界が180度変わった。

都會の小学校5年生の女子は、ちゃんと“女子”だった。男の子と外で遊ぶ子は少なかつたし、隣のクラスの誰それが格好よくて、好きだなんて話題ばかりだった。バレンタインデーのチョコレートを誰に渡すか、なんて話を田舎の小学校したことなど一度もなかった。

衝撃的だった。

同じクラスの気に入らない女子の悪口を言つ女の子についていけず、田舎と同じように男友達と遊んでいたら“男好き”というレッテルを貼られた。野蛮で、がさつな女の子だと言われた。

私はふりふりの洋服を着て、給食のカレーが服に飛ばないか心配しながら食べる彼女等を未知の生き物だと感じていたし、そういう女の子になろうとは思えなかつた。紙より重いものは持てません、という態度の女の子は顕著に私を嫌っていた気がする。

卒業までの1年は今思い出しだけでも嫌な味が口に広がる。

同じ市内で家を買った両親は、それを知つてか知らずか、中学校の学区が違うところへ引っ越した。その時にはもう“自分がどう思つていようとも周りにあわせる”というスキルが身に付いていたし、色々な小学校の出身が集まる中学校だったからか、特に問題もなく、大学進学まで、それなりに過ごして來た。

そんな私が大学に行つて好きになつたのは青山空知。名前の響きが面白い、と思つたのがきっかけだった。

10人中8人くらいは“かわいい”という評価をするであろう童顔な彼は、最初後輩かと思つたほどだ。座つていたソラチが立ち上がつた時の、あの異様なテカさに驚いた。

165センチの私は女子では高いほうだった。けど、その私より頭ひとつちょっと大きい。

童顔なのに長身のソラチは、そういう意味で印象的だつた。ちぐはぐで、女の接し方には馴れてそうなのに、同年代や年下にはたじたじなソラチが。

ソラチは私が思つていていた以上に年上に好かれる傾向にあつた。

気になり出したら、周りの女子が「空知くん」という名前を出す度に聞き耳を立ててしまつ。誰それと一緒にいた、だの、〇・しさんと手を繋いでいた、だの、目撃情報がすごく多かつた。でもその大半が年上だつた。

大学一年の夏前には、一いつ上の先輩と仲睦まじく歩いているのを見かけたし、学園祭では、〇Bの先輩に告白されたという噂も聞いた。

そんなソラチに広大な大学のキャンバスに在籍する私が関わりを持つのは至難の業だ。一年次は学部が違うから接点もなかつたし、同じ授業もなかつた。それに、ソラチは自分の興味のないことには一切脳が働かないらしい。

同じ学部の女の子が告白をした時、彼女は猛アタックの末告白に

挑んだのだが、名前はおろか顔を見てはじめましてだよね、と言わ  
れたらしい。

ソラチはバカだ。

人の好意になれすぎて、脳みそバカになつていてるに違いない。

泣きながら帰つてきた女の子を見て、彼女がふられたことを喜ぶ  
前に、ソラチをぶんなぐつてやろうかと思つた。彼女が空知と話し  
た回数は、彼女の話によると一度や一度ではない。ソラチに無性に  
腹が立つたのは、自分とその女の子を照らし合わせていたからだと  
思う。

すげー印象が良くなくていいからせめて、姿形だけでも覚えて  
らいたい。

そう思つたのは、そのことがきっかけだつたと思う。大学に居る  
女の子は、地味か派手かのどちらかだ。派手というと聞こえは悪い  
かもしけないけれど、流行に敏感でオシャレな女子が多い。

私は可愛くも美人でもない。

黒めがちで、コントクトがあいにくい目と、焼けたくても焼けな  
い、不健康そうにみられる白い肌くらいは誉められたことがある。  
後は普通。凡人の私が、ソラチの脳みそにどれだけ踏み込めるか。  
それなりに面白かった。

それから私は、流行の波に逆らつた。カツターシャツにジーパン。  
この姿を貫き通した。制服だと思えば、毎日着て行く服を考えなく  
て楽だつたし、カツターシャツも無地とか柄とかあって、集めると  
それなりに面白かった。

髪を伸ばす事にしたのは、兄の「女はやつぱりロングヘアだ」と

いう持論からだ。女の私にはロングだらうとショートだらうとどりでもいいのだけれど、兄はロングヘアに女を感じる、と言っていた。それにくわえて、ロングヘアの女を嫌いな奴は少ない、と言い切つた兄の言葉を鵜呑みにしたからだ。確かに、テレビを見ていたつて半分程のアイドルやタレントはロングヘアだ。

毎日無駄に講義を取つて、単位はお陰で一年に上がる頃には終わりが見えそうだった。

「いち」「ミルクと煙草、大学図書室の入り口真正面の席、カフェテラスの喫煙席が“いつもの”ものになって数ヶ月後、ソラカナラ声をかけられた。

「オネーサン、いつも何読んでんの？」

年上と勘違いされて喜んだのは、この時だけかもしれない。

そこからはじまつた私たちの付き合いには3年を迎えたとしている。

ソラチの女癖につとめつしているし、そのソラチを誘いまくるてつペー達にだつて苛々する時もある。

メールや電話だつて、何度送ろうとしてやめたことか。うつとう

しい女だと思われたくない、しつこい女だと思われたくないって必死だつた。

元々の性格も手伝つてはいるけれど、男友達のよつた感覚でいることが一番ソラチと一秒でも長く、同じものを同じ場所で見れるところに居れる条件だと思っている。

だから言えない。

行かないで、つて。

もつとかまつて、つて。

好きだ、と口にする事が怖い。

私はただ、臆病なだけだ。

だから試す。

ソラチが私を忘れていないか、試してしまつ。

それが一番、面倒な女だと自覚しながら。

「久しぶり~」

「……それ以外に言つ事ないの」

ソラチに言わずに卒業旅行に行つたのはつい一週間前。木下美樹達と、初の海外進出を果たした。はい、お土産。と言つてマトリョーシカを渡す。

「なにこれ」

「アトニヨー・シカ」

「知つてゐるよ。」

「聞いた癖になに怒つてゐるの？」

「ああ、ソラチが怒つてる。  
そう思つだけで私は胸がこゝぽこになる。  
これは変態の域だ。」

「なんで俺に黙つてたの？」

「聞かれてもないのに、わざわざいつつて変じやない？」

「……それもそうだな」

「でしょ」

はい、と言つて渡したチヨコレートソラチが首をかしげる。

「……ねえ、カナ」

「なに？」

「ビ」行つてきたの？」

アトニヨー・シカとチヨコを眺めながらソラチが尋ねる。

「ビ」ひて、ハワイ。綺麗だったよ、海とか、空とか、砂浜とか

「いやうん、いいよ。綺麗だつたのはよくわかるけど。マトリョー  
シカお土産つてなにこれ。ロシア行つたのかと思つた」

「露店で売つてたの。ほら、大統領シリーズなんだよ、これ」

「これをお俺にびりしる」

「枕元に置けばいいんじやないかな」

「……眠れない」

目が合ひ、とかなんとか言いながら、ソラチはヘッドボードの上  
に置いた。

ソラチが少しでも寂しいと思つてくれたなら、これ以上嬉しいこ  
とはない。

「で、その格好は？」

「ん？ なにが」

格好は、と言わてもハワイ帰りの私は半袖のカシュクールワン  
ピースの上にカーディガンを羽織つただけの格好だ。冬の日本につ  
いた時、「ポートのなんと温かいことか。そのポートはさつきソラチ  
がハンガーにかけてくれた。

「ワンピースです」

「見ればわかります」

「……脱げば半袖です」

「そんなことは聞いてません」

「じゃあ、なんだよ。」

「いついう格好俺は好きだけど、好きだけど…俺が居る時だけにして」

「…2度言ったのはなぜだろ?」

大事だからか?」

「だつて、ジーパン暑いし」

「カナはシャツがいいよ! うん、カナと言えばシャツだ!…」

「意味わかんない」

寒過ぎて頭が凍りはじめたに違いない。

ベッドに寝転んで漫画を読み始めた私に、ソラチはため息をつくと漫画を取り上げた。

「あ、何するんですかー」

「はい、今自分の胸元見て」

ソラチを見上げていた私は自分の胸元に目線を落とす。

「…何もないんですけど。」

してこうならハワイで女同士お揃いで買ったネックレスがある

だけだ。

「ネックレス？」

「違う」

じゃあわからん。

「まいこや。漫画かして？」

「よくない

そう言つてソラチは漫画をテーブルの上に置くと、私の胸元に手を突っ込んだ。冷たいソラチの手の温度に体がびくつとなる。そのまま胸を驚撃された。

「見えすぎ。お願いだから、そういうのは俺と出かけるときだけにして」

見えすぎもなにも、普通のネックだ。確かに空知の手が上から入る隙間はあるけれど、開きすぎとこりう程ではない。子どもみたいに拗ねるソラチが無性にかわいくてしかたがない。

「……考慮します」

「善処してください」

もお、俺心臓あと一つくらい欲しい、と呟いたソラチはそのまま私にキスをしながら覆いかぶさる。ソラチが私の体を触る時、女でよかつたと一番思つ。

そして、まだ私を覚えてくれている」とじどりしおりつもなく安堵する。

「今度黙つてどじが行つたら首輪つけてベッドに繋ぐよ

耳元で囁かれたソラチの本音に、嬉しくなる私はきつとやつぱり変態だ。

「大歓迎」

そう返した私に、嬉しそうに笑うソラチも同じくらい変態だ。

## 守宮のお姫様【人外？×社会人】

私が一歳の誕生日に両親からプレゼントされたのは、  
どこのをどう間違ったのか、ヤモリのぬいぐるみだった。

数あるかわいらしくファンシーなぬいぐるみの中から何故それを  
選んだ！ と、声を大にして叫びたいが、元々一癖ある両親だ。そ  
してその子供が私だ。色々諦めるしかない。

灰褐色の不鮮明に暗色の斑紋があるそれは、勿論抱いたらふかふ  
かの毛などない。妙にリアルに作られているヤモリは小さなうるこ  
がついていた。背面にある周りより大きめのうるこなど、リアリテ  
イを追求しすぎだと制作者に一言申したい。まあ、あれを引っ張つ  
てぶん投げるのは大層楽しかったですけれども。それに反してお腹  
側は頬ずりしたくなるほどすべすべだ。その感覚に、当時一歳の私  
は酔いしれていた。

記憶はないけれど、アルバムに写る私は、常にヤモリと一緒に満面  
の笑みでピースをしている。小学校二年生の時に図鑑で“ヤモリは  
危機を感じると尻尾を自分で切り離して逃げる”と書いてあり、試  
しに少しだけちょん切つて、綿が出てきて驚いた覚えもある。もち  
ろん再生なんてされないヤモリのぬいぐるみは、母親という名の玩  
具のお医者さんに縫つてもらひはめになつた。

今、改めて見直しても可愛いところは……“ごめん、ない。からう  
じて目がカワイイ！ とかあればいいのだろうが……ごめん、ない。  
夜中に目が合つてしまつとするレベルだ。

そんなヤモリとの決別を誓つたのはつい数分前。

大方整理の終つた荷物は四角い段ボールに入れられて部屋の隅に塔を作つてゐる。義務教育を無事終了し、都會に就職先が決まつた私は一人暮らしをすることになった。その荷造りの最中、タンスの上に居たぬいぐるみ群を片付けていたらヤモリが腕に落ちて来て、悲鳴を上げて今に至る。

もうそれは驚いた。

なんせ、クマだのパンダだの愛らしく可愛いオーラを放つてゐるぬいぐるみの中から、やけにリアルなヤモリが腕に落ちてきたのだ。悲鳴のひとつも上げたくなる。

「驚いた……」

そう言つて腕の中のヤモリを持ち上げて目を合わす。体調30セントチ強もある、本当にいたら化け物級のヤモリは、一歳の時には馬乗りにされ、三歳の時にはマドロスの如く台代わりにされ、四歳の時にはプロレスの技を研究するために実験台になつてゐた。……我ながら、すごい幼児である。

綿が寄つていて、くたついているヤモリはプレゼントされた時のようなハリはない。引越先が1Kということもあり、荷物は最小限にしたかった。もちろん、クマやパンダのファンシーなぬいぐるみ達は置いて行く。

「まあ、ヤモリだし」

迷うことなく元の位置に戻す。連れて行くという選択肢はない。

記憶は薄ぼんやりでも確かに私はこのヤモリが好きだった。最初は変わつた形の手のひらがかわいいと思つていたし、兄のようにい

きなり上に跨がって飛び跳ねようともヤモリは怒りもしないし抗議もしない。末子で歳の離れた兄達にやられっぱなしだった分、ヤモリが全力で私の鬱憤を受け止めてくれた。

暴力女と呼ばれ、野山を駆け回っていた過去は軽く封印したい事項だけれど、急に伸びた背と体のふくらみは、片田舎ではお姉さんらしかった。女子には羨ましがられ、男子には冷やかされることもある。ちょっと大人びた格好をすれば、いいなあ、と言われることが快感だったのかもしれない。昆虫採集が趣味で、じいちゃんの田んぼでアメンボ取りが楽しみだった私は、いつからかヒールのある靴を履いて、化粧をすることを楽しむようになった。

そんな私が、間違つても新しい生活の中にヤモリを持つて行ける筈などない。

明日には、この田舎から都会へ行く。

引越が終わり、荷物を全て片付け終えたのは三日ほど後だった。誰も知らない土地で生活できるか不安ではあったものの、隣近所の人も優しい感じの人達だったし、一月後には会社も始まる。元より一人で昆虫採集する趣味があつた私だ。部屋の中に一人というのは特別苦ではない。

「あれ、まだ残つてた」

段ボールを置んで紐で縛つてると、一日前に届いたベッドの下に小さな段ボールがあることに気が付いた。ドタバタしていて、潜り込んだのを見逃したのかもしれない。

それを引っぱりだして中身を開けると絶句した。

“あなたのパートナーです。忘れちゃダメよ！”

と書かれた紙とともに、ヤモリが入っていた。

この文字は間違いなく母親だ。下手な似顔絵がついているところなど、数十年経つても変わらない。何故か母親は、お母さんよりも書くと自分の似顔絵を書かずにはいられない質らしかった。

「……まあ、一個くらいいいけど

何故これを選んだ。  
と、いつかと同じ感想を抱いた。

それから掃除を済ませ、簡単な夕飯を取り、シャワーを浴びて新しいパジャマに袖を通す。以前ならそこからネットサーフィンに没頭していたのだけれど、如何せんまだ工事が済んでいない。テレビは持つてこなかつたのですることがなかつたせいもあるけれど、私にしては珍しい時間に眠りについた。

ついた。はずだった。

「んー……」

何かが私のお腹あたりを這つている気がして、寝ぼけながらもそこに手を伸ばす。ひんやりとした感触を気持ちいいな、と思ひながら

らその物体を撫でる。撫でているつむぎにわかったのは、それは人の手のようだということだった。

……人の手！？

一気に意識が浮上した私はその手を持つてひねりあげようとした。しかし、それよりも早く相手に手を引かれて私の手は空ぶる。

おかしい！ 鍵は全部ちゃんとかけたのに。

そう思つて目を開けると、

そこには大層見た目の麗しい妙齢の男子がいた。

「…………あれ？」

「あつぶねー。手、やられるとー」だつたし

ベッドサイドの明かりをつけると、灰褐色の髪色の、チャラ……。今時なお兄サンが私の上に馬乗りになつていた。色素が薄いのか、私よりも肌が白い。軽い口調なのが大変頂けないほどの美男子だ。

「すいません。退いて下さい」

「嫌だね」

「寝れません」

「つひ、この状況で寝るか、普通」

「…………夢オチつていう素晴らしきオチが世の中にはあつてですね」

と、夢オチについて語りうとした私の口を、先ほどのひんやりとした男の手が塞ぐ。近付く顔は、こんなところで私を襲わなくとも十一分に女子に襲われそうな造作をしていた。

すかさず出した右ストレートは呆氣なく受け止められ。使い物にならなくなつたら「めん」と思いながらも蹴り上げた足は私よりも細いくせに筋肉があるのか、男の足で挟まれて持ち上げることすら叶わなかつた。

「付き合い長いから、めぐのパターンなんて知つてる。俺を置いていいひつなんていい度胸してんじゃねえか」

あれ、私名乗つたかなと思つたけれど、こんな美男子と知り合いになつた覚えも長い付き合いをしてきた覚えもない。こうなれば手当たり次第投げつけるか、と思ってベッドに放つたヤモリを探した。ぬいぐるみでも、奴は見た目があんただから驚かせるくらいの成果はあるだろ？

と思つて掴まれていない左手で探してみるも、ない。

枕の横にあつたはずのヤモリは、男がどこかに放つたのか、私の寝相が悪過ぎて壁とベッドの間に挟まれて無惨なことになつているのか、どつちにしりいなかつた。

「まさか、俺のこと探してん？」

どれだけ自意識過剰なんだ気持ち悪い！と言えないのはこの男が美男子だからなのだろう。ああ、美しいとは罪だ。犯罪一步手前を美男子だからと許してしまつそつになる。頑張れ私、目覚めろ私の常識！！

「女漁りは他所でやつてくれませんか。私は眠たいんです」

「嫌だつて言つてるじゃねえか。俺はめぐがいい。俺に跨がつてプロレス技の練習台にするような、俺の尻尾をハサミで思い煩うことなく切り取つためぐがいい」

「…………やつぱり夢だ。うん。これは夢だ」

だつてそうでないと、この男はヤモリに違いないということを認めなければいけないということで、それは私の起き抜けの脳みそが全力で拒否をしていた。ありえない。何がありえないって、あの美男子つぱりがりえない。ヤモリなのに、美男子とか何オチ！？ むしろギャップ萌え狙い！？ つていうか記憶力よすぎませんか。

「めぐ、起きろよ。せっかく人間になれたのに寝たらつまんねえだろ」

「私は寝ています。話しかけないで下さい」

「…………人間つて寝ながら寝てるつて言つか？」

お腹の上の重みは全然退いてくれないし、むしろ視線が痛い。私の肌に穴が開きそうなほど見られているのが目を閉じっていてもわかる。

「めぐ寝てるんだよな？」

それに返事をしないでいると、遠慮なく冷たい手が私の肌を撫でていく。夜寝る時は、妙に息苦しくて何もしていない胸に辿りつく

より先に私は起き上がりて手を引っこ抜いた。何勝手に触つてんだ  
ヤモリめ！－ やモリのくせに、すべすべした手してんじやないわ  
よ！

「起きてる－－」

「……なんかいつ、通常の反応を求めるのは無粋だとは思つてたけ  
ど……めぐつて変な奴」

「ほつとこでよ。むしろ安眠妨害するな！ 大人しくヤモリつとい  
てよ」

「嫌だね。戻れないし」

その一言に、私は目を丸くする。

今この美男子と書いてヤモリと呼ぶ男は、なんと言つたか。

「戻れない？」

「うん、戻れない」

「綿は！？ 中の綿はどういったの！？」

「気になるところはそこしかねえのか！」

「そこ以外ないわ！－－ はつ！ 塩か。塩なんだな。もしくは  
熱湯か！」

「それはナメクジ！－ 落ち着け。とりあえず俺は湿氣で形成され  
ていない！」

「ありえない。最低。夢は夢でも悪夢だ。

落ち着けと言われて両手首を掴んでいるヤモリの手はさきちらんと五本ある。人間のそれと遜色ないその手は冷たい。

「……百歩譲つてヤモリが人間になつたことを認めたとしても、ヤモリは何するための人間になつたわけ？」

「え？ めぐの処女を貰いに」

「つて何で知つてるの！？」

「だからさー」！？

ギヤー恥ずかしい恥ずかしい死にたい。片田舎じやお姉さんキャラで色氣むんむんで憧れる！ なんて言っていた私が処女だと、なぜこの男は知つている、やはりヤモリだからか。いや、ヤモリにしたつて知り過ぎている。個人情報保護法はどこにいった！？

「お帰り下さい。出口はあちらです。靴はビーチサンダルなら持ち帰り可です」

「嫌だね。俺はここに住むつて決めたし」

「……家賃月100万円になります」

「高っ……」

「また尻尾……はないのか、残念。足ちょっとぎつて実験していいのね」

「普通にこじらへよ。あ、やつやつが前めがけの面つてかいて？？」

「まんまヤモリじゃないのー。ふざけてんのー？」

相変わらず馬乗りになつている守宮を退けようと力一杯胸を押す。ぬいぐるみのヤモリはすべすべしていたけれど、この男はヤモリのくせして固い。その手を、くすりと笑いながら守宮が掴んだ。近付いてくる顔を直視できなくて逸らすと、耳元で低い男らしい声が響いた。

「害虫はちやんと補食してやるから、大人しく守られや。めぐ」

「みつ……耳元で囁かないでー。」

「めぐは耳弱い？」

「ふつ、つて言つた。ふつー、つてーー、こじょぱーー。」

結局その日、ナニするためにやつてきたヤモリとの攻防戦でぐくに眠れなかつた。なぜこんな危ないものを寄越してきたのだ、母ぬ。こうして少し不思議なんて可愛いものじゃないヤモリの人間版と、私は一緒に暮らすことになつたのですが、それはまた別のお話。

## 同棲ブルー【社会人×社会人】

中学一年の春に出会ってから、気が付いたらいつも隣には拓真が居た。

私達の友達同士がカップルだったのもあるけれど、隣に拓真がいることが当たり前で家族の次に気を許せるまでになつた頃、拓真は私にキスをした。

友達同士でこういつつしていいの、って聞いたら、  
気付かないフリはやめたら、と言われた。

告白らしい告白がないまま、学生と呼ばれることがなくなつた今でも拓真は私の隣にいる。どこが始まりかわからない私達の関係は、今年で十年を過ぎた。

「一緒に住まない？」

大学を卒業して、拓真は一部上場会社のエンジニアとして就職した。一年の工場研修を終えて戻ってきた時にも一度言わされたことがあつたけれど、当時私は貯金があまりにもなさすぎて出来ないと断つた。

そのまま一年、特別関係も距離も変わることのないまま過ぎて、そりいえばそんなこと言われたこともあつたなあ、なんて記憶がおぼろげになつた夏。拓真の住んでる社員寮と言つても借り上げの賃貸なので普通のマンションだ。のポンコツエアコンが壊れたらしく、拓真の部屋にはやけにレトロな年代者の扇風機が、ブォンブォン音を立てながら温い空気を混ぜていた。暑さを紛らわすために買つてきた十本三百円で売つてある安いアイスの封を開け、高校野球を見ながら頬張つてゐるときに拓真がいつた。

「へ？」

「ナナあれから貯金全然増えてないの？」

七つのへその緒の子と書いてナオコと読む私の名前は、拓真は今も昔もずっと私のことをナナと呼ぶ。たまに本名忘れてるんじゃないかこいつ、と思つてゐる」とは内緒だ。

「いや、そんなことないけど」

社会人三年目。貯蓄ゼロなんて銀行窓口担当の名が泣く。

「けど？」

「今更？」

大学在学中には同棲とは言わないでも、半同棲のカップルなんて布団をたたけば出てくる埃のようにな山いた。地元を出たことない私や拓真のような実家組を除けば、付き合つて一月もすればそうなるカップルが多かつた。でも、それは学生だから一緒にいる時間が楽しいのであって、社会人も三年目に入った私たちが、何を楽し

むために同棲などする必要があるのだろう。

夜遅くまで残業のある拓真とほぼ定時上がりの私。休みの合間はいつも会つたりするだけで十分だと思っているのは私だけか？

「一年待たされたのは俺なんだけど」

「ああ、そういうえばそうか。あの時は飲み会三昧でお金なかつたんだよね」

新人歓迎会に始まり、“サークルOB会”と言つ名の女子会、就職を機に県外に出でしまつ友達の送迎会、と思つたら存外早く辞めて帰つてきて、おかえりなさい会、とまだまだ学生気分の抜けていなかつた私と、私の周りの友人たちは、何があるたびに集まつては飲んで喋つてはしゃいでいた。

今は結婚して落ち着いた友人もいるし、一児の母もいたりする。そういう年になつたのだなと報告葉書をもう一度に思つよつにはなつた。

結婚  
拓真と？

考えたことがないわけではないけれど、いつも長く一緒にいると改めて結婚する意味がわからぬ。別に金銭的に困つてゐるわけでも、子供が欲しいわけでも、何か大きな転機があるわけでもない。今がとても心地よいのに更になにか行動を起こす気はあまりなかつた。

「今度おばひやんとおじちゃんの都合のいい日聞いといて

アイスの棒を口に挟みながら立つた拓真は台所に向かう。出合つた時は私と同じだった目線は、頭ふたつぶんほど拓真のほうが大きくなつた。男にしてはちょっと高かつた声も、今では随分低い。

「なんで？」

「なんだ、つて。フツーに考えて俺があいさつに行くのは筋でしょ」

拓真の言つフツーが普通に思ひ浮かばなかつた私は、あんた私と結婚する氣か、と心の中でつっこんだ。同棲つて、そんなに気合入れてするものなの？

「別によくない？ 結婚するわけじゃないんだし、もう成人もとうに超えた大人だよ私たち」

「…………じゃあ俺が挨拶したいから、おじちゃんとおばちゃんに聞いといで」

「んー、わかつた」

中学校からの付き合いの私たちはお互ひの両親に何度も会つたことがある。もちろん兄弟姉妹も知つていて、なぜか墓の場所まで知つていて。参つたことはないけど。

「同棲ねえ……」

テレビの中に居る自分達の後輩は、甲子園の舞台に立つことなく涙をのんだ。相手の校歌齊唱を聞きながら泣いているピッチャーの顔を、私はただじつと見ていた。

夏は、もうすぐ終わるとしている。

「へえ、でもたつくんのところ寮でしよう？ 独身寮じゃなかつた？ あ、今日夕飯食べて帰るわよね。今日はたつくんが来るつて聞いてたからハンバーグにしたわよ」

私の母親は疑問系のわりに答えなんて聞いていない。よくもまあ料理を作りながらあそこまで話をできるものだ。なぜか実の母親の作るものより私の母親が作るハンバーグが好き、というのは中学校の時の拓真の文句で、二十五歳にもなればハンバーグ以外も好きなくせに、訂正せず今に至っている。

「ありがとう、おばちゃん。独身寮だからナナの会社と俺の会社の間取つたところにいい物件あつてさ、そこにしようかなと思つてる」  
何故か夕方から日本酒を飲んでいる拓真の向かいには、我が家の中酒豪、父親がいる。

「そこはその、なんだ、治安とか大丈夫なのか。七緒子の方が早く帰るだろ？ 通勤の便はいいにこしたことはないが、安全の方が大事だろ」

「おじちゃんはそう言つと思つてたよ。大丈夫、ちゃんと大家さん

が隣に住んでるし、近くに交番もあるから。通学路に面してるし。  
なんならおじちゃん明日一緒に行く？ 敷金払いに行くから見せて  
もらえるよ」

ドラマみたいにスーツとか着てきたらビックリよ、と思っていた  
拓真は、淡いブルーのシャツにチノパンと、普段のTシャツジーパ  
ンより少しだけ小綺麗な格好で現れた。中学校の頃からお互いの家  
を行き来していただけに、言葉遣いが特別改まっているわけでもな  
く、小綺麗な拓真が家に遊びに来た程度のことだった。

「ただいまー、ってあれ、たっくんじゃん。何ビックリしたのついに結  
婚でもすんの？」

三つ年下の妹は大学生だ。小学校四年の時から顔見知りの三紀子  
は拓真のことを兄のように慕っている。まだ三紀子が小学生の頃、  
一度だけ拓真と派手に喧嘩をしたことがあった。拓真が大好きな三  
紀子は泣きながら私に仲直りしてと言ったことがある。妹の方が拓  
真のことすこい好きじゃん……と、当時私は、三紀子をなだめなが  
ら思つた。

二十歳を超えてから、たっくんが本当のお兄ちゃんになればいい  
なあ、なんて言われたことも一度や一度じゃない。親より私に拓真  
との結婚を迫つている。

「おかえり、みっちゃん。ちがつけがつ、でも一緒に住もつかと思  
つて」

「えーー！ 同棲？ ねえ同棲？ いいなあ、どこ住むの？ 引  
越したらいいつていい？ つていつか泊まりに言つていい？ いいな  
あ、あこがれるなあ。あ、もしかして今から宴会？ 和真呼ぶか、

和真。ねえ、たっくん。あたしあ風呂入つてくるから和真呼んでおいてー」

三紀子の弾丸トークつぶりは間違いなく母の遺伝だ。しゃべりだしたら止まらない、人見知りをしない愛嬌のある妹だけれど、いつもに返事をする機会を作ってくれないのは些か問題だ。

「三紀子！ 拓真君を使うな。呼びたければ自分で呼びなさい」

「って、呼んでいいのか父よ。

拓真にも三つ年下の弟がいる。私と拓真が中学からずっと一緒にいたようだ。三紀子も和真くんと中学からずっと一緒にいた。大学は違うらしいが、今でもたまに遊んでいるらしい。付き合ったこともあったそうだが、早々に別れだと聞いたのは高校一年の時だ。

「はあーい。ねえ今日ハンバーグ？ あたし大根おろしがいいなあ

「自分でやりなさい」

「ヤダ。だつてネイルしてきたばつかだもん。お母さんお願ーい！」

甘えた声を出しながら三紀子はわざと自分の部屋がある一階へと駆け上がつて行った。

「しょうがない子ね、本当。七緒子、ちょっとおひじしてやつて

「はーい」

お皿を出していただけの私は母親の隣に立つて大根を持つ。その

まま靡り下ろやうとする私を、母親が驚きの顔で見ていた。

「ん？ なに？」

「何じゃないわよ七緒子、冗談よして」

「なにが？」

大根を持つてそのままを下ろやうとしている私の「」が「冗談なんだろう。ああ、一本おろすのは多いもんね。切れつてことか。

「……ああ、そりだよね。ごめん、ごめん。ちょっと包丁貸してね」

「やつよねー。させたことはないけど見たことくらいはあるわよね。お母さん焦つたわ」

「えへへ」

「つぶつぶ」

そうこうして包丁を大きく振りかぶつて落とした。  
それと同時に母親が短い悲鳴をあげる。

「え？」

「え？ じゃないわよ。七緒子、家庭科の成績そり悪くなかったわよね。いつも調理実習ひんなことしてたの？」

「知らないの？ お母さん。調理実習ひて担当制なんだよ」

「まさか七緒子、あなたー……」

「もちろん洗い物担当。包丁って刃物だし怖いじゃない。だからいつも他の料理上手な子がしてくれてたよ」

その言つて、切つた大根を手に取つたところで母親の手が私の手に触れる。下ろし金を左手に持つている私は母親のぞつとした顔を見て、首をかしげた。

「なに?」

「七緒子、『ご飯作れるの?』

「作れるよ。私じゃなくて炊飯器が

「……」

笑顔でいいきつた私に、母親は明らかに安堵のため息をはいて手を放した。

「そうよねえ。今は文明の利器がいつぱいあるものね。大丈夫よね」

「……う、うん。大丈夫だよ。ほら大根おろし作るんでしょ?」

「そうね! でもその前に皮剥いてね」

「皮?」

そう言つて自分の右手にある大根を見る。ああ、白いからわからなかつたけれど、確かに固い皮がある。

「じゃあ、はい」

「なに?」

なにじゃないよ。皮を剥くつていつたらあれでしょ。

「ピーラー。なーいの?」

「……ないわよ。包丁でもあるじゃん? 調理実習で習わなかつた?」

「嘘つけど、調理実習の時は全部ピーラーだよ」

「せ、せ、まあ、できなくとも困らないけどね」

そう言って私の手から大根を取ると母親は器用に大根の皮を包丁で剥いた。料理番組でよく見る、桂剥きだ。名前は知っているが、やる勇気はない。

「す、す、いねえ」

「本気で関心してる七緒子が心配だわあ。ちゃんとご飯作れるのかしら」

そう言わながら、私は綺麗むかれた大根をおろした。

「ねえ、たつくん。本当に七緒子でいいの? 」この子、料理からつきしよ

父親と酒を飲み交わしている拓真がこひらを向く。

「おばちゃんの娘だもん、ハンバーグだつて、いつかきっと美味く作ってくれると思つ

そう言つて笑つた拓真に、母親は上機嫌でマシンガントークを始める。拓真の向い側に座つている父親は、お前がきちんと教えてやりなさいと言つていたが、母親に聞こえたかどうかは定かでない。

落ち着かないなあ、と思いながらふと視線を上げると、拓真と目が合つ。その顔はいつも通りで、困惑の色が浮かんでいなかつたことに、私はすぐ安心した。けど、安心したことに驚いた。

それまで、自分が自分であり続ける場所が、拓真の隣だと思っていた。だから心地良いし、ずっと一緒にいたいと思う。その形がなんであれ、隣にいられればそれでよかつた。

ただ、先日浮かんだ結婚の一文字によつて、その意識が私の中で変わつたのだと思い知らされる。料理が出来て、家事をそつなくこなし、毎日お弁当を作つてあげられる、素敵な奥さん。そういう世間一般にいい奥さんだと言われる女を拓真に望まれている気がして、料理が不得意という欠点が、人として駄目な点になつたように思えた。

拓真の奥さんとして駄目な点。

それが、思いのほかダメージが強くて怯む。

同棲の先にあるだらう結婚が怖い。

同棲をして、掃除も料理も苦手な私が、拓真に失望されるのなんて時間の問題だ。それは怖い。明日私を日がけて隕石が降つてくると言われるより、怖い。

和真くんも参加してにぎわった両親への挨拶といつ宴会は、日付の変わる少し前にお開きになつた。コンビニに寄つてから帰るといつ和真くんには三紀子が付き添い、私は駅から電車に乗つて帰る拓真に付き添つた。帰りが心配だから、と半分の位置にある公園までのお見送り。たつた五分の道のりだけど、足が重い。

私は、形のない影を怖れている。

こんなにも、拓真の隣にいられなくなつたらどうしようかと思つたことは、今までになかった。

「ねえ、拓真」

「なに?」

頬の赤い拓真と私は、もう歩きながら手を繋ぐこともない。それを寂しいと思わなくなつたのは、いつからだろう。

「私、頑張るから」

そう言つた私に、拓真は何も言わなかつた。

言わない代わりに、拓真は私の手と自分の手を絡めた。

数秒前に少し寂しく感じたことを知つていていたみたいで、少しだけ悔しかつたのは内緒だ。

拓真の隣にいたい。  
だから、頑張ろう。

と、思つて早一週間。

「出入り禁止ーーー！」

入つてくるな、と言いながら母親が目をつり上げておたまを振り回している。拓真が挨拶に来たのだから、あんたも挨拶しなさい、と母親が週明けに言つたのが始まりだつた。そこから親同士が連絡を取り合い、何故か我が家に拓真の両親が遊びに来ることになつた。

拓真のおばさん達がくるまであと三十分。

この一週間で、私は洗濯物を洗つて、干して、畳むこと。御飯を研いで、釜にセツトし、スイッチを押すこと。粉末だしの入つたお湯に味噌を溶くことを覚えた。

何の問題もない。料理チャラい、と思つていたのが悪かつたのか、怪我こそないものの、包丁が刺さつたままのアボカドと、緑の葉がこんもりと盛られた頂点に君臨するトマトを見た瞬間、母親の沸点が一気に上がつた。

「七緒子ーーお母さんはサラダを作つてねつて言つたのよーー？」

それは間違いない。

そして私の出した材料も間違つてはいなーーはづだ。

「うそ、だから、トマトとアボカドと、レタス??」

「いれはキヤベツーーー！」

キヤベツと言われて描かれたものは、皿にこれでもかと盛られた緑の葉だ。確かにちゅうと固いけれど、バナナの熟れる前が固いみたい、そのうち柔らかくなるだらうと想っていたのだ。……キヤベツ……ですか。

「ちゅうと間違えただナジやなーーー！」

「見た目がつて言つなんうともかく、切つてもわからないなんて、七緒子馬鹿じやなーのーーー！」

「実の子こ馬鹿とかひどーーー！」

「実の子だから言つてゐるのよ、いの大馬鹿ーーー！」

それで済んだらよかつたものの、次はトマトを握つてこれも、と言われた。

……それもか。赤いからトマトじやなーいのーーー？

「…………トマトだよね

「アーマー！」

「なんだ、合ひじるじやなーーー！」

「丸いとのつけたサラダなんて見た事ないわよ、切りなさいーーー！」

「切ったわよ、ほらーーー！」

「……ねえ、七緒子」

「なに、お母さん」

「プチトマトじゃないんだから、それに切って終わりなわけないでしょ？」

「……じゃない、オシャレよ、オシャレ。斬新でしょ？」

どうにか機嫌を直してもらおうと思つたけれど、母親の怒りは結構大きかつたようで、本当に出入り禁止にされた。アボカドの種に思い切り包丁を突っ込んで？？あまりに固かつたので、全体重をかけつづまな板に叩き付けていたせいかもしれない？？取れなくなってしまい、父親にも怒られる始末だった。

だつて、アボカドなんて切られた状態でしか見たことがない。どこに種があるかなんて、想像することすらできなかつた。

「ここにわづめー」

拓真の声がして出迎えると、中学の時からさほどかわらない、おじさんとおばさんが居た。かわいい七緒子ちゃんと言つてずっと可愛がつてくれている。そして、そんな両親の仲の良さが今回は裏目に出了。

同棲の挨拶もほどほどに、私の母親が拓真の両親にこの一週間の惨事と題して、あれやこれやと話してしまつたのだ。

「普通見たらわかるでしょう？ 洗濯洗剤つて書いてあるのに、この子柔軟剤入れただけで洗ったのよ。もう一回洗うはめになつたんだから」

とか、

「米研いで、スイッチ押すだけなのよ？ それに一時間要するつてどれだけ不器用なのかと、自分の子供ながら驚いたわ」

とか、

「掃除機が壊れたつていつから駆けつけたら、電源さすの忘れてたのー。もう本当心配よ、七緒子は。ごめんねえ、拓真くん」

と、洗いざらい最初から最後まで話しきつた。

場は失笑と爆笑が混じつてよかつたのかもしけないけれど、私はあまりの羞恥に拓真の顔を見られなかつた。

ごめんね、不器用で。

ごめんね、いい奥さんになれそうにもなくて。

せめて役立つようにと進んで料理や飲み物を運んだものの、会話を途切れさせてしまつたり、お皿を配るのもトロすぎで、拓真のおばさんが手伝ってくれた。

せめてと思いながらも慣れないことをしたのがバレバレで、私は自分で自分の墓穴を掘つた。掘つて、掘つて、掘りまくつて、ついには身動きできなくなるほどだ。

休日出勤の拓真が、九時頃に帰宅の旨を伝えると、神にすがる思

いで私も席を立つた。母親のこの子は不器用といつ言葉も、拓真のおばさんの、そのうちできるわよといつ氣遣いも、もうお腹いっぱいだった。涙の壺は、もつ溢れそうになつてゐる。

「私、拓真送つてくるねー。」

たつた五分の距離なんだから、といつ拓真のおばさんの言葉や、氣をつけてねといつ母親の言葉を背につけながら、拓真の後ろを急いで続く。

拓真が、見送りなんていよつて言わないことが、すいじく嬉しかつた。

たまたまだつたとしても、この場に一人残されることは痛い。今は三紀子も和真くんもいないのだから、話は必然的に私と母親達になるのだ。飲んでばかりの父親達はアテにならない。

「暑いな」

「暑いね」

夏が終わつても、まだ暑い。

最高気温が二十八度なんて、まだまだ日常の秋は、どんどんと空の色を濃くしている。

「なあ、ナナ」

「なに?」

「俺、笑つてるナナが好きだからそんな顔すんな」

普段好きだとか愛してるだとか、ねだつても言つてくれない拓真がぼつりとこぼす。一瞬聞き間違いかと思ったのは、そんな言葉をろくに聞いたことがなかったからだ。

「え？ 今なんて？」

「一回は言わない」

「お願い！ もう一回だけ！..」

「嫌だ。絶対言わない」

服の裾を掴んだり、突いたりしても、拓真はもう一度は言つてくれなかつた。言つてくれなかつたけれど、心はあたあたかい。気をつかうなんて忘れてしまつたのかと思っていたけれど、私は、こうして要所要所で慰めてくれる拓真を、その度に好きになつていたことを思い出した。

「ありがとう。時間はかかるかもしれないけど、家事頑張るね」

「いいよ別に」

決意を新に宣言したのに、あつさりと覆されて驚く。隣に居る見慣れた顔を覗き見ると、じろじろ見るなど言つて小突かれた。

「なんで？ 料理も、掃除も、洗濯も、出来たほうがいいじゃん」

「俺はそれよりも、帰つてきてナナが俺のジャージ着ながらアイス食つて笑つてるほうが安心する。いつものナナと俺は一緒に住みたいんだよ」

「拓真……」

「あ、でもな、俺のジャージ着るのはいいけど、ナナ襟元きつこつて伸びすだろ。俺着たらアレコレなんだけど」

あの癖だけはひとつにかして、とお願いされて私は決壊した涙をぬぐいながら首を縦にふる。

拓真、隣に居ていいかな。

私はかみみたいにずっと笑う」となりできるか。

毎日だつてできるか。

「……」「めぐ。でも襟元伸びるのはやめられなこと無い

鼻をすすりながら言つ私に、拓真は頭を撫でながら苦笑した。

「じゃあナナは、ナナにあつたジャージ買つて。俺、首さむい」

「やだ。拓真のがいい」

「なにその嫌がらせ」

「違うの。拓真の着てると、拓真のにおいがするんだもん。自分の顔を上げると、呆然と私を見る拓真と田が合つた。

まるで子供のように手を繋がれながら、私はこぼれる涙をすくってはこする。気持ち悪いと言いそうな拓真が何も言つてこないので顔を上げると、呆然と私を見る拓真と田が合つた。

「……………えりしたの?」

「……………なにもない」

何もないと言いながらそっぽを向いた拓真の耳は赤かつた。久しぶりに照れる拓真を見て、私は微笑まずにいられない。握られた手を強く握ると、拓真もぎゅっと握つてくれる。

それだけで、私は幸せだ。

「ねえねえ、拓真。たまにはせ、いつして手繋いでトーントヨウ

「嫌だよ、気持ち悪い」

「ひどい。」

もうすぐ別れの公園前。  
来月拓真の背中を見送る時は、こいつらじゃこいつらばかりね。

## 夢見がちな女と伝わりにくい男【社会人×社会人】

私の視界は、常にたゆたんでいて一向に晴れることはなかつた。

だつて、何度見ても綺麗なんだもの。  
何度見てもカッコイイんだもの。

ずっと夢見てきたこの瞬間に、泣くなと言われる方が無理だつた。

「……ミー口泣き過ぎ」

「うるさいなあ、今日はいいの」

三つの紀州の子と書いてミキ口と読む私の名前を、ミー口と呼ぶのは今も昔もずっと田の前の男だけ。たまに本名忘れてるんじやないか、と疑つことがあるのは内緒だ。

挨拶を兼ねてお酒を注ぎに回つた両親の席に、大変偉そうに座つた“親戚”を見つめる。自分の見た目が派手で、よく女にモテることを知つている私の親戚。

「だつて、たつくんはカッコイイし、お姉ちゃんは綺麗なんだもん」

ぐずつと鼻をすすりながら、ハンカチで押さえるように涙を拭う。お色直しに出て行つた一人がいなくなつた会場は、談笑とスクリーンに映し出された一人の写真を見て、時折派手な笑いが響いているだけだ。

中学生くらいになると、別々だつた一人の生い立ちはぴたりと重

なる。中学生時代というテロップが出た後、一年の運動会で、二人は何故か互いの鼻に全力で鼻フックしている写真が映し出された。  
……数ある写真の中からこれを選ぶ二人のセンスが、私は大好きだ。  
例え、おばあちゃんが目をひんむいていても。

十一年。お姉ちゃんとたっくんは、中学校の頃からの恋を大事に育てて、今日の日を迎えた。同棲一年を迎えた頃、同棲しますと言いに来たたっくんは、結婚しますと言いに来た。その頃、お姉ちゃんはやつとハンバーグが作れるようになつたところで、けれども完成するまでに四時間かかると愚痴つていた。

……普通にかかりすぎだし。四時間お姉ちゃんは、一体何をこねているのだろう。

私は嬉しかつた。  
二人の恋が実つて。

自分が出来なかつたから。

憧れているばかりで、私にはそういう大事にしたい恋に出会つた  
ことがない。

お姉ちゃんとたっくんは私の目標で、いつも羨望の眼差しで一人を見ていた。漫画みたいな小さな奇跡が目の前にあつたのだ、憧れ

るのは当たり前だ。

一度いいことにたっくんの弟も私と同じ歳で、これで私と和真が付き合えば、それこそ漫画みたいなお話じゃないかと、その状況にときめいた。中学生だった私の目の前にきらきらと光ったガラスの靴が見えた気さえする。その勢いにまかせて、和真に告白したことがあった。

お姉ちゃんがたっくんといふのと同じくらい、当時中学校一年生だった私と和真も同じ時を過ごしていた。なんとなく付き合って、なんとなく一年が過ぎ、なんとなく一年目を迎えた。

けれどもそれは、私の憧れでしかなく、和真にとつても、彼女という名のアクセサリーでしかなかった。

高校生になつて急に大人になつたような気がしたのは、私だけではなかつたらしい。

手と手を握り合つだけの関係から、唇と唇を合わせる関係になり、そのまま欠けたものを埋める関係になるのも、崖から転がるようになつた。

そして、関係の終わりも同じように時をすべる。

嬉しい筈の行為は、ただただ空しいだけで、それをお互いが感じてしまった。

手と手を握り合つだけでは錯覚できていた想いは、深く繋がつたことで嘘だと知る。

恋に恋をしていた。

私は、お姉ちゃんとたっくんののような恋を、自分と和真で実践しようとしていただけ。和真是、アクセサリーでは、心の隙間を埋めてくれはしないと気付いただけ。

一年も続いていたのに、と言われた私と和真の交際は、高校一年の夏に終わった。

それだけだった。何も残らなかつた。

その和真是、今、私の目の前に義兄の弟として座つてている。豪華な室内に劣らない、中学の頃より大人びた和真。

今でもたっくんが家に来れば、私は話し相手がいなくなるので和真を呼ぶ。面倒くさそうに返事をする癖に、それでも訪ねてくる和真の優しさに、私は甘えきつていた。

だから、和真の言つた言葉が一瞬何を言つているのかわからなかつた。

「俺も、結婚しようかな」

お姉ちゃんとたっくんがひままで座つていた高砂を見て、和真がこぼす。

私と別れてから、和真が女子をとつかえひつかえしているのは知つていた。それに傷つくことなんて一度もなかつた。私だって、カッコイイ男の子に告白されたら、“いつか好きになるかも”なんて思つて付き合つては別れることを繰り返していた。そのまま高校、大学と一緒に道を歩んだけれど、男と女として交わることがなかつた。

就職先はさすがに別々だったので、この一年、和真がどういう生活をして、どういう人と出会って、どういつ想いを抱いてきたのかは知らない。

それこそ、私は和真と別れてから、和真の一切の感情なんて理解できない立ち位置に居た。

私が大事にしたい恋を見つけられない間に、和真はそれを見つけたらしい。そのことに対し、先を越されたという悲しみや悔しさとは違うものがこみ上げた。

「…………結婚式見ると、結婚したくなるよね」

誰と、とか、私の知ってる人、とか、聞きたいことは幾らでもあつた。でも、それは全部飲み込んだ。一筋こぼれた涙の意味が、自分自身でもわからない。和真が、お姉ちゃんとたっくんに感動して泣いていると勘違いしたままでいてくれと願うしかなかつた。

私は何が悲しいのだろう。  
何がこんなにも痛いのだろう。

和真を利用するだけしておいて、好きだなんて言つ資格があるとでも思つてゐるのだろうか。私の恋愛「こゝに気付いておきながら、甘んじて受け入れてくれた和真を、これ以上振り回してはいけない。

？？ ミーハは楽しかつた？

別れの夏、最後に聞かれた言葉を思い出す。  
楽しかつたと答えた。

だつて、私が望んでいた、お姉ちゃんとたっくんのような恋だつ

たもの。

それを見透かしていたのに付き合つてくれていたのだと、気が付いたのは随分と後だった。

和真は知っていた。

口は悪いし、意地悪だし、平気で人の頭殴るし、優しいばかりじゃなかつたけれど。和真は優しい。

クールでカッコイイなんて言われている和真じゃなくて、ドラマで犬が死んじゃうシーンとかで、静かに涙を流す和真の優しさが、私は好きだった。

たつくんとは違う優しさ。

そこだけは、ちゃんと私も現実を見ていたと、今でもはっきり言える。

「『』と結婚してくれるような物好きいんのかよ」

悪そうな笑みを携えて、和真が私を小突く。

結婚式の前に会つたのは、お姉ちゃんがたつくんを連れて“同棲宣言”したあの日以来だ。

「世界中のどこかには、そういう物好きも居るわよ。和真こそ? ?

そんなに口が悪くて、態度も大きくて、がさつで、脱いだ靴下は丸まつていて、放つておけば万年床の布団で寝ちゃうような和真と、結婚したいと言つてくれる物好きなんているの? ?

そんな風にこぼれそうになつた口を縫い付ける。

どの口で、どんな顔で、私は和真に言つてしまつたのだらう。

わかつたふりのくせに。

まだ和真に近いのは私だと思いたいなんて、滑稽な想いを暴露する気が。

「なんだよ、途中でやめんな」

「なんでもないわよ。よかつたわね、そういう相手が居て」

おめでとう、とは田を合わせずに言つた。

司会進行の人気が、そろそろお姉ちゃん達が帰つてくる田を言い始めたので和真はそのまま自席へと戻る。

空になつたビールの瓶を持ちながら帰つてきた両親の、刻まれた皺をまじまじと見た。

結婚。  
誰と？

初恋の相手はお姉ちゃんと結婚した。

付き合つた男達は私に優しくしてくれたけど、ただ、それだけだつた。

欠缺たものを埋められない私は、高校一年の夏からちつとも成長していない。

大人ぶつた仕草で誤魔化して、恋愛なんてと強がることを覚えただけ。

我が儘で、気分屋で、口うるさい。

そんなりのままの私を受け入れてくれる人なんて？？

「……いないのかも」

だつて私が受け入れられない。

少しでも思つていた人と違つたら、途端に恋が冷めてしまつ。

口が悪くて、態度も大きくて、がさつて、脱いだ靴下は丸まつて、放つておけば万年床の布団で寝ちゃうとなつたのを見ると、他の男では引いてしまうのだ。

最長記録は和真との一年で、

他の素敵な男の子達と、私は一年ともつたことがない。

「なあに？ 何か言つた？」

黒い留袖を着た母親に尋ねられる。

「ごめんね、お母さん。お父さん。

娘が結婚をして、孫を見せてもらひ」とが親孝行なり、私はもつと先のことがもしれない。

もしかしたら、生きているうちに間に合わないかもしぬない。  
親不孝な娘で」めんね。

「なんでもない、ほら、お姉ちゃんたち来たよ」

開かれた扉の向こうに、幸せそうにかむお姉ちゃんたちがいる。

綺麗。

とても綺麗。

眩しくて、思わず目を瞑つてしまつ程に？？

「一次会？」

「そ、う。三紀子も来るでしょう？ 会場はこのままこのだから。二時間ほど時間潰さなきやいけないけど、これ、ラウンジのチケット。ここでお茶でもしてて」

参列者を見送り、同じように一次会に出席するらしいお姉ちゃんとたつくんの親友達に囲まれながら、お姉ちゃんは手短に言ってチケットを私に渡す。私が口を開く前に、そのまま違う人のところへ行ってしまった。

本当なら喜んで参加するのだけれど、正直気が重い。  
明るくて、いつもはつちやけている七緒子の妹。

その肩書きを背負うには、私も徐々に大人になりつつあった。  
毎日が面白いことだけで溢れているのではない、社会に出れば嫌でも気付く。

それまでの恋の些細な悩みや、レポートの期限なんて軽いものに思えるくらい。

手に握られたラウンジのチケットを持つて、私はエレベーターの

ボタンを押した。

一階のラウンジには、黒いスーツと華やかなドレスが離れた場所でそれぞれに談笑している。一目で年上と分かるその人達は、お姉ちゃんやたっくんの会社の人なのだろうな、といつとはすぐにわかつた。

高校生の間までなら、少なくとも顔くらいはわかる。

ずっとお姉ちゃんの背中を追ってきた私の人生は、お姉ちゃんの交友関係がそのまま影響していた。三歳差の兄弟姉妹は、世の中にありふれている。

ラウンジに入つてチケットを渡すと、お好きな席へどうぞと言われる。

一人でいるために迷つていると、カウンターに座る和真を視界に捉えた。

そのまま、和真とは反対の一一番端の席に腰を下ろす。

適当に飲み物を頼むと、そのままスパンコールの沢山ついた携帯とハンカチくらいしか入らない鞄の中から、携帯を取り出した。

昔は、一人ぼっちだと手持ち無沙汰することがなかつた。

今は、携帯という便利なもののお陰で、一人の暇つぶしにも時間は気にならない。

「お待たせ致しました」

そう言つて運ばれて来たカクテルを見つめてお辞儀をすると、また携帯の画面に視線を戻す。何かの気配がしてまた顔を上げると、そこには和真がいた。

「……なに?」

「//ー口のやせこ、こつ携帯変えたんだよ」

私のくせにとか、もうこの口の悪いことに直したら、いつもなりやうつ言つたれど、今日は言わない。

それを言つのは、私の役田じゃない。

「口の間」

「なんで? まだ新しかったじやん、//ー口のやつ。しかも俺と色々だし」

「だつてセー、和真の携帯みたらスマホ欲しくなったんだもん」

わざくれた心に蓋をして、なんでもないようになつるのは得意だ。二人姉妹の妹は、可愛がられ慣れているし、可愛がられる術を知つていて。

「真似ばっかりだな」

「いいじやん、可愛かつたんだもん、口のペンク」

嘘。

本当は、和真が携帯変えたから変えたの。いつまでも遠いようで近い昔馴染み。

くだらない電話も、メールも、律儀に返してくれる和真のことを見

男とか、そういう分類でなく好きでいることは確かだ。男と女として交わらないことを知っていても、和真を手放すことなんてできない。じつそり携帯を機種変更して、色違いを買つてしまつことで、満足できる私の名前がない想い。

「//ー「に自慢するんじゃなかつた」

「残念でしたー」

お気に入りだったピンクの携帯。

今は持つていることさえ恥ずかしい。

彼女が居る時は、誘つても和真は私と会わない。電話も出ないし、メールもそつけなくなる。

だから油断していた。

今は別に大丈夫だろうつて。

もし、和真が結婚したいと思っている彼女が、私と同じ色の携帯を持つていたら。

私は穴を掘つて埋まりたい。

「なあ

「なに?」

「これ、やるよ」

手をグーにしたまま、和真が私に手を差し出す。首をかしげてい

るど、手。と言われた。

手を出せ。

それくらい、ちゃんと言いなさいよ大雑把だなあ。

「飴のカスとかだつたら、いらないよ

「余計な事言つてないで、手」

押しの強さに負けて、手のひらを和真の拳の下に持つて行く。小学生の頃から、何度もあつた同じシチュエーション。

時には飴のカスで、  
時にはせみの抜け殻だった。

時にはコンドームを差し出してきてからかって、  
時にはお揃いのケータイストラップをもらつた。

付き合つていた時の、最初で最後のプレゼント。

和真が私にくれたものは、ケータイのストラップだけだった。

和真の気持ちも、それ以上の関係を期待できるようなプレゼント  
も、何もなかつた。私の乙女がちな思想に少しだけ寄り添つてくれ  
た和真。

「大事にしろよ」

そう言つて私の手のひらに何か置くと、ゆっくり和真の手が離れる。

私の手のひらに残されたものを見て、息が止まるかと思った。

つい何ヶ月か前に、私がたっくんに見せたものだつた。雑誌に載つていた指輪の中に、お姉ちゃんの好みそうなものがあつた。だから、こんなのもいいんぢやないつて、たっくんの家にあがりこんで見せた覚えがある。同棲した時から結婚するものだらうと思つていたし、たっくんも雑誌貸して、と言つて喜んでいた。男兄弟のたつくんの家では異色だらう、女性向け雑誌。

私が貰うんだつたらこれがいいなあ、なんて眺めていたものが、今手のひらにある。

「…………なんで？」

「冗談にしては物のチョイスも値段もすぎる。  
そして、そんな冗談、私の知つている和真はしない。

「返品不可だから」

「疑問の返事になつてないんだけど」

私と和真は付き合つてなんかいない。  
付き合つてたことはあつても、それぞれ別の道を歩んでいたはずだ。

「私と結婚するような、物好きはいないつて……」

泣くな私、と念じていても涙腺は言つことを聞いてくれない。  
こぼれる涙を、和真の親指が雑に拭つた。

「俺以外いないつて意味。つていうか、ミー口はすぐ泣く。バスに

なるぞ」

「バスにしてんのは和真じゃない……」んなの、私、だつて……」

言葉にならなくて詰まる。差し出されたハンカチをそのまま受け取つて、優しく頬を撫でる和真の手に、私の堤防は大きく決壊した。

どうして？

いつから？

「ハーハが言つてたんだろ」

私が？

そう言われて、高校一年の夏、と和真が言つたところで思い出す。それは、ブラウン管のテレビに映つた高校野球を見ながら、和真の家でアイスを食べている時のことだ。その時、私は雑誌をみていて、和真はテレビを見ていた。

「ねえねえ、和真。これみてー」

「なんだようぜえ、俺テレビ見てんだけど」

実況中継が、四番バッターの名前を読み上げる。甲子園常連校らしいのだが、私にはさっぱりわからない。和真は今いとこだから、と私を突っぱねた。

「もー、ほんと和真つてばそつけないよね。モテないよ」

「彼女持ちがモテるわけねーだろ」

「えーでもお、たつくんとかモテてんじゃん」

「じりねーよ、兄貴と比べんな

むすつとした和真は、それで何？ と言つて私の持つていだ雑誌を覗き込む。投稿者から寄せられた、彼氏彼女のあれこれを特集したものだつた。結婚しました、という題名で載せられた、とある恋人達の話を私が指差す。そこに和真の視線が注がれた。

「……ありえねーよ」

「そんなことないつて、運命つて絶対あるよ」

「ばーか。一回付き合つて別れた時点で終わりだろ」

「そこから長い年月を経て、もう一回付き合つて、結婚するつていうのがドラマチックじゃない」

「はいはい、ミーハの頭は今日もわいてんな

ドラマみた이나、漫画みた이나、お話の中みた이나、恋。それに憧れるだけなら、誰にも迷惑かけないでしょ？と、私は言った覚えがあつた。

その恋人達の再会のきっかけは、友人の結婚式。

そこで会えるとわかつていた旦那さんが、奥さんへ指輪を渡したのだそつだ。

結婚式と一次会の間のプロポーズ。

長い年月、想い合つなんてなんて素敵。

「ぜつてーありえねーって」

「でも、いつして載つてるんだから、現実でしょ？ 和真つてば夢がないなあ」

「〃ー「は夢見過ぎ」」

「いいじゃん。夢見たつて。プロポーズくらい夢みたいよ」

その会話の一週間後、私たちは別の道を歩くことに決めた。

そんなこと、私は和真に言われるまで忘れていた。

「え？ でも、和真それから何人も彼女いたじゃない」

「〃ー「も彼氏居たな。しかもあんまり続かない軽そうな男ばっか」

見た目だけでいえば、和真も負けとは居ない。

女に軽そうで、自分はもてると知っている男。こんなプロポーズを絶対しなさそうな男。

「……なんで知つてんのよ」

「知られたくなかったら、変なマフラー音たたせるような男と付き合つなよ。うるせーし、近所迷惑」

その近所に住んでいるのは知つてはいたものの、そこまで和真が私に興味があることにも驚いた。別れた時点では、興味なんてないと思つていたのに。

「きもーい、ストーカーみたい」

「だろ。だから観念して、俺と結婚しようよ。」こんな回りくどいとしてくれんの、俺くらいだぜ」

「……和真つてずっと私のこと好きだったの？」

90

「有り得ない。  
色々有り得ない。」

「いや？ うるせー奴としか思つてない」

「ひつじー！」

しつと五月蠅いとか言う奴が、本当に何故こんな回りくどいことをしてくれるのか。質の悪い悪戯だと罵つたほうがいいのか、騙されたフリをして受け取るのがいいのかよくわからない。和真の望んでいる返事は、何なのだろう。

「ただ、俺、結婚するなら一緒に居て気が楽な奴がいいんだよ。」「なじしてやつてもいいかなつて思つただけ」

そう言いながら顎をかく。

恥ずかしがつていてるときの、和真の癖だ。小さい頃から変わらない。

ストーカーとか言つて肯定しかやつ、危ない彼氏も旦那も「めんだけど。

「ま、あの汚部屋を文句言わずに片付けてくれるのも、私しかいな  
いか」

「嘘付け、文句たらじやねえか」

「文句のひとつも言いたくなる部屋だつて」とよ

「じゃあハーネスが片付けてくれりやあいじやん」

「当たり前だし。私言つとくけど綺麗好きだよ?」

「知つてゐる。昔からじやねえか」

ちゃんとほめとけ、と言つて私の左手薬指に指輪をはめると、和真は恥ずかしそうに恥ずかਸをむいた。

「うひこう時はわあ、嘘でもいにから好きとか言えばいいのに」

「はあ? 調子乗んなよ」

「またまたあ、私のストーカーなんでしょう?」

「やけにやしづながらスースの裾を持つと、やめると言つて和真が振

り扱う。

「やつぱつやつぱる、ハーハーハーハーハー」

「返品不可でーす」

「ふふふと言ひて笑ひと、和真は心底嫌そうな顔をした。

本氣で伝わりにくい和真の気持ち、これから私はどれだけ気付けるのかな。

毎日「ひさやつするほど?」普通にうんざつって言われた?のメールも、深夜に突然かかってくる鬱陶しい?普通に鬱陶しいって言われた?電話も、付き合つてた女にすらしない。ハーハーハーだけ。

と教えてもらつたのは、また別の日のことだった。

## お化け屋敷へようこそ【幽霊 × 魔術】

「え？」

「ですから、ここは人外専門です」

その言葉に、僕の脳は現実逃避を始めた。  
空耳かもしれない、もつ一度聞いてみよう。そう思つのも無理はないと思つんだ。

「あの、仕事が欲しいんです。普通の」

「ええ、どれも普通ですよ。おたぐの場合でしたら山奥の廃墟なんていかがですか？」

「いえ、普通の？？」

「普通のお仕事ですが、何か？」

戸惑う僕に目の前の職員は、かけらもこいつとせず言い放つ。

わう言しながら、くいっとあがられた黒斑眼鏡の職員をじっと見る。指サックをしながら書類をめくり、面倒くわそうに僕を見上げる男。戸惑う僕。

一体全体、なんでこんなことになつているんだ。

抱えよつと手を頭に持つていった瞬間、また、自分の前に手が現れる。まるで“頭なんてなかつた”かのように舞い戻つた手のひら

を見て、僕は思い出した。

僕は、昨日死んだ。

最後に覚えているのは、暗い山道で突然出て来た鹿の、ライトに照らされて不気味に光つた真つ白な目。

「幽霊」とつての普通の仕事については、大抵こんなものですよ」

よく見ると、職員の口からは一本の前歯が付き出し、横に長いヒゲが何本か鼻の下から伸びていた。もつ毛りとした頭の中には丸い耳があるのでないか。僕がそう想像していた瞬間、少々お待ち下さいよ、と言つて席を立つた職員のお尻には、ネズミのような尻尾がついていた。

吐き気がする。

僕は、“人外ハローワーク”と書かれた看板の下で、出るはずのない胃液を飲み込んだ。

「あの、すいません」

戻ってきた職員に声をかける。

もし、僕はあのまま、ブレーキが遅れて、もしくは踏んだもののスピンしてガードレールに突っ込んで落ちて、死んだとしよう。

だとしたとして、何故ハローワーク。  
死ぬ氣で働けと言われたことはあるけれど、死んでも働けなんて  
酷じゃないか。

「なんでしょう」

「ここは、どこですか?」

「ハロー・ワークですよ」

「あ、いえ。そりでなくて、場所はどこですか?」

そう尋ねた僕に、目の前のネズミ職員は首をかしげる。質問の意味がわからない首のかしげ方ではなく、何故そんな当たり前のことを聞くのか、と言いたそうな首のかしげ方だった。

「どこでもない場所ですけど」

「どこでもない?」

「はい。どこでもない場所三番地、右奥の斜め上です」

その回答が斜め上です、と言いたくなるのをぐっと答える。何故住所に斜め上。

「そう……ですか」

「ええ」

見慣れたオレンジ色の指サックで、ネズミ職員は紙の束をペラペラと捲る。生きている頃は、僕もオレンジ色の指サックはすこくお世話になった。営業事務という、営業の人達がスムーズに動けるようサポートする立場だった僕は、毎日書類を捌き、営業のプレゼン資料をまとめる日々だった。営業の人達にクソカス扱いされてたけど、負けるものかと歯を食いしばって耐えてきた。

男が一度勤めた会社をやめるなんて、男をやめるのと同じだ。

なんて言つちやう頑固な昔ながらの親父のお陰といつおうか、僕はずつと皆勤賞だった。どれだけ理不尽な言葉を浴びせられても、仕上げた資料をそのままゴミ箱に放り入れられても。

僕が、男であり続けるために。

「ああ、ijiなんてどうですか？」

過去の記憶に思いを馳せていた僕は、ネズミ職員に小突かれて前を向く。差し出された資料を見て、思わず僕は目が点になった。  
…今、目があるのかどうかすら疑問だけ。

？？？

勤務地：日本の真ん中あたりの遊園地、“前代未聞！お化けも怖がるお化け屋敷！！”敷地内  
勤務時間：開園から閉園まで。閉園後も残る場合は、巡回の警備員を脅さないこと。

時給：人の生氣（実体のある場合、日本円で730円　試験期間内は700円）

条件：初心者可、実体のあるなしは問いません。現在募集してい

るのは、若い男の幽霊、首無し女、狼男（変化できる方のみ）言語は日本語のみ。会話の難しい方は、「遠慮下さい。」

？？？

「お化け……屋敷ですか」

「ええ、おたく幽霊ですか」

あんまりにもあつさり言われると、なるほど、なんて納得してしまう。先ほど見せられた公衆便所や廃墟の募集要項より、屋根付きな分いいかもしね。

？？いいかもしないって、僕は本当に死んで頭の回路がいかれてしまったのかもしない。もしくは、いかれるような頭の回路を持ち合させていないのかもしない。

幽霊になつた心当たりならある。

何故だか働かなければならぬらしい、といつのは今の状況でよくわかる。

それならば少しでも条件の良いところに、と願つてしまふのは就職氷河期を痛いほど味わつたからだろうか。

「じゃあ、これで」

「はいはい。えーっと、ああ、どうしましょかね

長いヒゲを指でひつぱりながら、ネズミ職員が眉間に皺を寄せた。

「どうかしたんですか？」

「いやねえ、おたくの実体申請、どうひじょうつかと思いまして。  
ある、か、ない、かしか選択なくてねえ」

何のことかよくわからなくて、曖昧な返事を返すと、ネズミ職員は「実体・ある・ない」と書かれた紙の「・」の部分を丸で囲った。  
……なんだろ?」の適当さ。

「先方についたら、おたくが自分で半透明ですって言つておいてくれ  
ださいね。見たら分かると思うけど」

そうとひつひづけられた言葉によって、僕は僕が半透明だとこいつ  
とを知った。

言われた通りのバスに乗つて外を眺める。お化け屋敷につくまで、  
外は真っ暗だつた。何分乗つていたのかもわからない。幽靈だから  
時間の感覚が鈍つているのかもしだいけれど、早かつた気もする  
し、遅かつた気もする。

おかしな夢なかもしれない。

実は植物状態で、だから僕は半透明なかもしれない。

お化けにも定年があつて、そこまではがむしゃらに働かなければ  
ならないのかもしれない。

沢山の“かもしけない”を考えて、それでも出ない結論に僕は考えることを放棄した。考えたところで、僕はお化け屋敷に行くしか仕様がなく、それ以外に残された道はない。半透明な分、賃金が実体の半分貰えたらいいな、と思うことくらいしか、希望らしい希望は思い浮かばなかつた。

「お待ちしてましたよー。よひーそお化け屋敷へ」

お化け屋敷の前でバスから降りた僕を待ち受けていたのは、“山田家之墓”と書かれた墓石だった。どこが目でどこが口かもわからぬ。少しだけ浮いている山田家の墓は、枯れた花が一輪刺さっていた。妙に高い声が、僕の耳をくすぐる。触れないでの、あるかどうかはわからないけれど。

「あ、あの山田さん」

山田家と書かれている墓にそう声をかけると、墓石がぐるぐる回る。“山田太郎 建”と書かれた部分が僕の目に前に止まつた。

「私の名前は権田原です。今度から権田原、もしくはゴンと呼んでください」

むつとした声が“山田太郎 建”から聞こえてくる。

果たしてこれがツツ「ミ待ちというものなのか、本気なのか、判別がつかない。何せ相手は墓だ。しかも思い切り山田と書かれた墓だ。全国の山田さんと山田太郎さんに、何故だか申し訳ない気持ちになる。

僕も、元鈴木としては、権田原のよつに複雑な名前に憧れた時期もある。

あるけれど……やっぱり山田をひとしか呼びよつがないと思つてしまつのは僕だけだらうか。

「ああ、はい」

「で、あなたは？ 何と呼べばいいですか」

そう尋ねられたので、僕は僕の名前を告げる。

「鈴木健太郎です」

「ブツティイですね、わかりました」

「いえ、鈴木けんたる……」

「ブツティイの待機場所は井戸の中でお願いしますね、あと、浴衣の着方わかりますか？ わからなかつたら、適当に着て下さいね」  
山田さん改めゴンさんは人の話を聞いていない。どうしても僕をブツティイと呼びたいらしい。

「はあ……。あ、あの、僕、鈴木と言つんですが、半透明なんですか？」

と言えと言われていたことを思い出して、真つ直ぐ前を向く。  
ゴンさんは“山田家之墓”を僕の方へ向けて、しばらく黙つた。

「……そんなもの、見ればわかりますけど」

「……そうですよね」

「プッティー、しつかりしてくださいね」

鈴木健太郎のどこを取ればプッティーになるのか考えながら、僕は井戸の中へ入った。

第一の僕の仕事場は、暗くて湿つていて、蜘蛛の巣がはつていた。だけれど、ちつとも臭くなくて、ひどく落ち着いたのは僕が幽霊だからだろうか。

足音がしたら飛び出す。

第一の僕の仕事は、ただそれだけだった。正方形の窮屈だけど安心する狭さの井戸から、できるだけ素早く姿を現す。ただ、それだけ。

開園しているのか、していいのか、それすらもよくわからない。バスから下り立つた時は青空が見えたような気もしたけれど、あれからどれだけ時間が経つたのかもわからない。

今までにしておけばよかつたと、なんてくだらないことを考えながら、僕は足音が来るのを待つた。

僕の担当していた三人の営業さん達は、皆短気だった。書類が揃わないと怒つて、仕上げたものを寄越すとかさ張ると怒る。八つ当たりもよつちゅうだった。それにずっと歯をくいしばって耐えるだけじゃなくて、嫌なら嫌だつてはつきりいうことも大事だったな

と思つ。本人を目の前に言える性格じゃないのはよく知つてゐるから、人事部にかけあつて部署移動をすることだつて出来たかもしない。

きっと僕みたいなほんやりした男となんて似合わないと諦めていた、制作部のみかちゃんに、何かアクションを起こせばよかつたな、とも思つ。食事に誘うなんて勇気はないけれど、いつも会う喫煙室で、「お疲れさまです」「忙しいですね」「じゃあ、お先です」以外の言葉なら言えたかもしれない。

そう思い始めると、実体があつたうちは戸惑つていた一歩が、大したことないように思えた。難しいと思つてゐるのは僕自身だけで、半透明の今の僕からみれば、何故こんな事態に陥つたのか、という原因を探るよりうんと簡単だ。

井戸の中から真っ暗な天井を見上げて思う。  
側で焚かれた煙も、ひゅーどうどうという効果音も、いつもなら怖いのに、全然怖くない。

そんな時、足音が聞こえた。  
できるだけ素早く姿を現す。  
これが、僕の仕事だ。

「ぱあつー。」

もつと他に怖い台詞があればよかつたのだろうけれど、「コピー機の紙づまりを解消することくらいしか褒められたことのない僕には、これが精一杯だった。」

「さやあああああ！」

「うわあああああー！」

女の子らしい悲鳴に、僕の悲鳴が重なる。  
だって、目の前には……

「お化け！！」

「あんただって、お化けじゃない！ びっくりさせなこでよーーー。」

僕は、生まれて初めてお化けに遭遇した。そして、怒られた。

ほんのり涙目の中の彼女は、半透明の僕とは違つてきちんと実体がある。今見えている姿が生きている時の姿なら、僕と同じ歳くらいの清潔そうな女の人だつた。髪の毛を後ろでひとつにくくつていて、目鼻立ちがくつきりしている。氣の強つそうな瞳は揺れている。

「すいません！ 僕もお化けなんですけど、初めてお化けをみてびっくりしたつていうか、なんていうか……」

大の男が悲鳴をあげるなんて、つて父親が居たら怒られそうだけど、これは仕方がないと思う。清潔そうな端正な彼女の顔は、僕よりも随分下に存在している。

まあ、と言ひながら飛び出した僕の目の前に現れたのは、パンツスーツを着た女性が、小脇に首をかかえて歩いていたのだ。その瞳が左右にきょろきょろと動いていれば、驚くなという方に無理がある。首のあるべきところに、首がない。

びっくりした途端に落ちたことも、僕を心底驚かせた。

「首が、落ちたのでびっくりしました」

「……半透明のあなたに言われたくないわよ」

「……そうですよね」

それが、僕と彼女の出会いだった。

休憩時間に、実は彼女も同じ人外ハローワークだったとか、生きていた頃は僕の会社の近くに彼女の勤務先があつたとか、美味しいと思ったランチのお店が同じだったとか、名前が小鳥が遊ぶと書いてタカナシと読むとゴンさんに説明したら、ステキステキと石をぐるぐる回しながら喜ばれて、たかなし様と崇められているという話をした。ゴンさんはどうも、難読な名前が好きらしい。

そんな僕と彼女が恋をして、そのお化け屋敷が縁結び屋敷なんて別名がつくのはもつともっと先の話？？。

「ねー、まだ来ないの？」

「来ないね」

「えー！ もう飽きた。帰りたい」

「まあ、そう言わずに」

「だつて、御飯まずいし、ネット繋がつてないし、ネイルの飾り一個取れたんだもん、テンション下がる、マジ帰りたい」

人々から怖れられ、常に周りは暗闇が纏い、負の力が渦巻く？？設定の魔城。その城の中でコケの生えた猫足のバスタブに体を沈めながら、端正な顔の女が防水ラジオのチャンネルを合わせてている。しかし、辺鄙な場所に作られた魔城は電波の通りが悪い。つい先日やつと電線が通つたばかりという田舎っぷりなので、それはご愛嬌としか言い様がなかつた。

薔薇の花びらをふんだんに浮かべ、一つ飾りの取れた美しいネイルをした女は王都の生まれだ。産声を上げたその瞬間からデジタル放送だつたし、インターネットは光通信が常識だ。今時力チカチ鳴りながらインターネットをせつこら繋げるモデムなど、魔城に来るまで知らなかつたものだ。過去の遺産が、魔城には最先端の技術として息づいている。

絶世の美女？？という設定の姫は、雑音ばかりのラジオに腹を立てる。姫は、魔城に来るまでラジオなど聞いたことがなかつた。全

てはインターネットとテレビで貰えたし、欲しい情報は検索すれば出てくることが当たり前。そういう認識でしかない。

「まつたく何やつてんのよ、勇者のやつー。わざと迎えに来なさいよね」

ロールプレイングゲーム王国、ワンセーブ王国の一人娘。それが彼女の肩書きだ。攫うのは必ず魔王。姫を救うのは勇者。そのセオリーでここまでやってきた。

現在の姫と魔王と勇者の悲……喜劇は今年に入つて百一回目。

最初はやる気のあつた三人であつたが、攫われ慣れた姫と、討伐され慣れた魔王と、姫に振り回され慣れた勇者のモチベーションは、随分と下がっている。三十手前の男女が送る日常としては、刺激が少な過ぎた。それが、ダレにダレきり、風呂につかりながら勇者の迎えを待つ姫、などという現状を作つたと言つても過言ではない。

「ねえ、これ壊れてるんじゃないの？ ゼンツゼン電波受信しないじゃない

「姫が雑に扱うからじゃないかなあ……」

「はあ！？ 超纖細に扱つてるし。不良品よ、不良品ーー！」

シャワーカーテンの向こう側、洋式便座の蓋の上に座りながら、姫の監視を続ける魔王に向つて、姫は雑音しか聞こえないラジオを大きく振りかぶつて投げた。豊満な胸がふるりと揺れ、バスタブから薔薇の花びらと白く濁つた湯が流れる。姫持参の入浴剤だ。

「いたつー！」

魔王の見た目は、魔物を統べる王として相応しい見た目をしている。人間よりも動物に近い見た目と、人間の三倍はあるだろう背丈はただそこに居るだけで人間を恐怖させる。ただ、人間の“慣れ”というものは恐ろしい。既に顔見知りどころか三田に一度は顔を突き合わせている姫にとつて、魔王は恐怖するどころか、ペットだ。気が弱く、実は草食系。できるならば、勇者と鉢合わせせずに姫を攫つてはくれないかと考えるほど、平和主義な魔王だった。ペットが妥当な位置かもしれない。

「姫、物は投げちゃダメだよ」

「つむさいわね、じゃあ私にそんなポンコツ寄越さないで」

「姫がくれつて言つたんじやないか……」

「じゃあ私のスマホ返してよー。」

「駄目だよ！　この間まいいかと思つて没収しなかつたら、ずっとゲームしてた挙げ句、勇者来たのに今いとこりだからとか言つて、三田くらい帰らなかつたじゃん！－！」

「馬鹿じゃないのー　ゲームじゃなくてアブリよーー。」

「なんでもいいよーー。」

角が少し泡にまみれたラジオを拾おうと、魔王が立ち上がる。ガチャリと重い音がしたのは、腰に巻かれた大剣だ。錆びないように手入れを怠つていなその剣が最後に活躍したのは、かれこれ數十年前に遡る。一度適当に振り回したら、勇者の前髪をうつかり切つ

てしまつた。それからの惨事を思い出すと、魔王は今でも青い顔をして震えてしまつ。勇者は、名の通り勇氣ある者だ。性格だけみれば、彼が魔王でも何ら不思議がないというのが世界の見解である。ただ、外見がべらぼうに美しい。姫と並ぶと絵になる。彼が勇者であり続ける理由は、その一点のみだ。

魔王がまさにラジオを手にとつた瞬間、ラジオが電波を受信し、世界で一番有名であり安定した電波を飛ばす放送局のアナウンサーの声が仄暗い魔城に響く。

「え？」

「あ、入つた。そこから動いたらもう一度と電波は要らないかもしないから、ラジオ動かさないでね」

「ええ！？」

先ほどまでの雑音が嘘のように、はつきりとしたアナウンサーの声がラジオから聞こえる。ただ、タイミングが悪かった。魔王がラジオを手に取つた瞬間。つまり、でかい団体を折り曲げて中腰になりながら手に取つた瞬間に電波が入つた。姫が言つたことを実行するならば、魔王は姫の気がすむまで、地面から数センチ浮かしたラジオを動かすことはできない。ずっと中腰のまま、勇者を出迎えることになる。

「文句あるの？」

「え、いや……」の姿勢つらいなあつて思つて

「普段する」とないんだから、ラジオくらい持ちなさいよ

「ラジオを持つのはいいんだけど、この姿勢が……」

「うぬせこ野ね、モテないわよ」

「すぐモテなこいつのやめとよ、気にしているの」

「じやあそのカバーコーディングにかしながら」

「ええ、まだカビくわい？ 右けんが悪いのかなー」

「うよつとー、聞こえなくなつたじやない使えないわね！ 」  
そう言つて魔王がラジオをそつと床に置いた瞬間、ラジオは雑音に変わる。

「姫は人使いが荒すぎるわよ」

「だつて姫だもの」

そう言われては魔王は何も言えないのだが、またしても中腰のままラジオを数センチだけ上げる。そうすると、相変わらずかつこいいですね、というアナウンサーの声が聞こえた。どうやら誰かにインタビューをしてこるらしい。

『どうも』

その声に、姫も魔王も思わず我が耳を疑つた。

『今回も、姫が攫われたそうですが』

『ああ、 そ う な の ？ メ ー ル 来 て な い か ら 知 ら ね え わ』

そ う 言 い 終 わ る が 早 か っ た か 、 固 形 石 鹰 が 飛 ん で く る の が 早 か っ た か 、 そ れ は 誰 に も わ か ら な い 。 小 気 味 良 い 音 を 立 て て 、 魔 王 の こ め か み に ヒ ッ ト し た 。 ヒ ッ ト し つ つ も 体 勢 を 崩 さ な い よ う 魔 王 は 踏 ん 張 る 。

「 ち ょ う と 魔 王 ！ 勇 者 に 連 絡 し て な い の ！ ？」

「 だ つ て こ の 間 電 線 通 つ た ば か つ り だ つ て 言 つ た ジ ゃ ん 。 業 者 の 人 が 電 話 機 の 型 番 間 違 え て 、 魔 城 に 合 う 奴 を 取 り 寄 せ る の に 一 週 間 か か る つ て 言 つ た ん だ も ん 、 ま だ な い よ ！」

「 今 ま で み た い に 鳩 飛 ば し な さ い よ 」

「 前 飛 ば し た 鶏 が 、 勇 者 に 食 べ ら れ た の が 最 後 ！ 魔 城 に い る 鳥 は 全 部 送 り 出 し た の ！ 文 句 が あ る な ら 食 べ る 勇 者 に 言 つ て よ 」

「 食 べ ら れ る よ う な 鳥 寄 越 す ん じ ゃ な い わ よ 。 美 味 し か つ た わ チ キ ン ス テ ー キ 」

「 う わ あ あ あ 、 僕 の ア リ ス ！」

「 鳥 に な ん て 名 前 つ け て る の よ 、 気 持 ち 悪 い 」

ア リ ス …… と 呟 き な が ら 田 元 を こ す る 魔 王 は 、 ラ ジ オ の 向 こ う に い る 勇 者 の 声 に 耳 を 澄 ま す 。 早 く 姫 を 連 れ 戻 つ て 欲 し い 。 そ れ が 彼 の 今 の 切 實 な る 願 い だ つ た 。 ?? 連 れ て き た の が 彼 だ と い う こ と が 事 実 だ と し て も 。

『今回は、どのよつな方法で姫を取り戻すのじよつか?』

『あー、もつ今回はめんどうなとてやめとくべ』

その声に魔王は身構える。こんなことを言われて黙る姫ではない。そんなじりじりしい姫は、この喜劇が三度目を迎える頃にいなくなつた。

「ふざけんじやないわよ、勇者の奴!! めんどうなじりうつうじよ、めんどうなじよ!!」

「姫、落ち着いて」

「落ち着けるわけないでしょ、馬鹿じやないの。この口ケーーー!」

「え? アリス?」

「口ケくさこの口ケよー。今この状況で、なんで私が鳥真似なんてしなきゃなんないのよ」

どうぞと中腰の魔王が姫をなげさめている間に、インタビューやは続いて行く。

『面倒ですか……』

『ていつか遠いから正直ダリイ。新幹線か高速通る予定とかないんすか?』

『あ……私は何とも』

『ああやつ。じゃあ帰つていい? 見たいテレビあるんで』

『姫はいいのですか?』

『ガキじやあるまいし、勝手に帰つてきたらいんじゃね』

『この放送を姫が聞いておられたら、悲しみませんか?』

『あの女がそんなやわなわけねーじゃん。きっと風呂でも入りながらまんねーつてほざいてやがるに決まつてる』

まるでHスパーのような勇者の言葉に、姫は言葉が詰まつた。勇者の想像は一ミリたりとて違つてなどいない。まじしく風呂に入りながら飽きたとこぼしたところだ。

『そり……ですか、では姫に一言』

『今日の晩メシ唐揚げだから。食いたかつたら帰つてこいよ』

『だそりです。以上、勇者に直撃インタビュードした』

陽気なメロディーが流れる中、魔王はそつとラジオを床に置く。雑音になつたラジオの電源をそつと落とした。シャワーカーテンの向こう側では、無音が続いている。

「魔王」

「はーい。」

「帰るわ」

「へ？」

「帰る」

「え、でも助けー……」

「帰る。あんたが鳥の話なんてするから、唐揚げ食べたくないなつたじやない」

「じゃあ、今日唐揚げしようか？」

おそれおそれたずねると、シャワーカーテンの向こう側にいる影が、ゆらめいて止まつた。豊満な胸の影がもう少しでバスタブから見える。そのギリギリのラインに思わず魔王が睡をぐくつと飲み込んだ。

「…………ムネ肉、しじうが多め、にんにく控えめでよろしくね」

そう言つて湯に浸かり直した姫を、魔王はほつとしたような、残念なよつた気持ちになりながら仰せのままに、と返事をする。

「勇者が来るまで、帰らないんだから」

二日に一度の魔城訪問。

それは、勇者と姫夫妻の喧嘩の回数と仲直りの回数と比例する。

「なんで俺、夫婦喧嘩に付き合わなきやいけないんだが？」

許嫁から婚約者、婚約者から夫婦に肩書きが変わつても、勇者と姫は毎度喧嘩を繰り返す。今回は、姫が楽しみにとつていたチキンステーキ最後の一切れを勇者が食べた。それが発端だつた。

「何か言つた？」

「いいえ、何も」

「あ、やつやつ。明後日合戦あるひじいんだがど、来る？」

「こぎます！　いかせて頂きます！」

三日二一度の姫やつ。

それは、魔王の合戦回数と比例する。

「あ、鳥ないんだつた」

合戦に浮かれた魔王がそれに気付くのは、随分と後のことだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9783y/>

---

短

2011年12月5日23時45分発行